

J2.99:12

12 of 20

Jan. 1945  
Vol. 3, no. 1

67/14  
C

ぼ  
す  
と  
ん

文  
藝

新

年

號



UNIVERSITY OF CALIFORNIA  
LIBRARY  
FEB 22 1945  
DOCUMENTS DIVISION

魚  
友  
文  
藝

# ポストン文藝 新年号 目次

改

變(表紙)

沙

漠の冬(寫眞)

浦

島(寫眞)

都

鳥(寫眞)

卷

頭言

新年の詞

年頭の詞

思想といふもの

勘須磨の浦島を觀て

ポストンを訪ねて

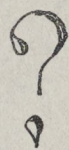
隨想

街頭の宗教  
開人の寢  
泥道で拾ふ

ポストン生活

吟詩漫筆

特輯



諸家の回答

雨の夜の祈り

佳約者

黙想する脚

自由律俳句

新春句集

詩と俳句

霜月歌會詠草集

短歌

選後隨錄

柳川

新年祝詠  
句會并互選

懸賞小説  
當選作

一つの解決

小説開拓者

編輯後記  
カッ  
原板

貴家璋造

進藤舟水

蟹江米男

同

ダンカン・ミルス  
ジョン・パウエル

ポリン・ブラウン

谷川江浦草

翠川敏

渡邊美代子

三谷真種

芳竹庵

外川明

貴家孝子

大岡周洋

諸家の回答

牧さゆり

マイ・シユネ

青木伸

大月・河口

永瀬勇

島原潮風

千世

芳川積三

進藤舟水  
瀧井謹平



冬之漠沙

TKS

## 卷 頭 言

新しい年は新しい希望と決意とを以て出發しよう。假へ昨日は陰慘であつても、希望を捨てないで、よりよき明日である事を確信して、今日に最善を盡せば我等の期待と確信は裏切られるやうな事はないであらう。灼けつくやうな沙漠を綠野と化した我等である事を想へば、心の底から大きな歡喜が湧き出づるではないか！今日は昨日の單なる連續ではない。明日の果實を創造せんがため、今日の鋤を以て昨日の土を堀り返すのである。斯くして始めて昨日は今日のため、明日のためのよき肥料となるのである。此の認識の下に、過去の失敗を再び繰返さぬやう、受けた恩誼を感謝しつつ、よりよき未來への飛躍を期して、現在を最も有意義に過さうではないか。

今日は如何なる時代であるか？ 今日我等は如何なる環境に生きて居るか？ そして何が故に我等は斯かる環境にあるのか？ それを正視し、その誤たざる認識を把握した時、我等は如何に發言し、如何に行動すべきであるかといふ事が自ら明かとなるであらう。我等は余りに多くを語るが故に、眞に言ふべき言葉を忘却してはゐないであらうか？ 我等は余りに多種多様な行爲に忙殺されるが故に、眞に爲すべき事を逸してはゐないであらうか？


新春と共に、我等の心を若々しい更生の意氣に燃え上らしめ、愉しい明日へと、強く正しい第一歩を踏み出さうではないか。(N・M)

The Poston I Poetry Club has had a long and honorable career. Of its members, many have gone out into new homes and jobs. Many of those still in Poston are serving the community in positions of high responsibility. Yet all have found the time, the energy, the imagination, to sustain their part in this creative fellowship.


Activities like these tend to contribute, and to preserve, the qualities of serenity, of reflectiveness and sensitivity without which community life would be less rich. Such groups reflect credit not only upon their faithful members, but upon the community in which their art is practised. We extend our hearty New Year's greetings and good wishes to the Poetry Club.

*Duncan Mills*  
Duncan Mills, Project Director

*John W. Powell*  
J. W. Powell, Ass't. Project  
Director



## 新年の詞



所長    ダンカン・ミルス  
副所長    ジョン・パウエル

ポストン文藝協會、今日に到る迄の輝やかしい歩みは洵に感に堪へない所であります。

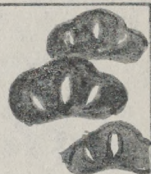
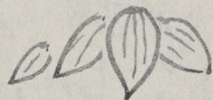
推ふに會員諸氏の中には或は新らしき生涯を外に見出された人もありませう。併乍ら今尚大多數の會員諸氏はポストンに在つて社會の一員としての大きな役割りを果して居られるのであります。

實に諸氏はその余暇を割きつゝ、逆る精氣と構想を獨創と、その生命とする文藝の上に傾倒されてゐることを知るのであります。

斯くの如き文藝活動は溢るゝばかりの麗しき省察力と感受性とをその社會に培ひ、克く社會をして内的に深めるものがあることを信じて疑はない者であります。

このことたるや一に文藝會員の功績に歸すべきは論を俟たない所でありますがその反面、功績の一端は又その社會自體にも歸せらるべきものであると思ふのであります。


終りに臨み、私どもは心からなる新年の辞を文藝協會へ贈り新春の御挨拶に代へたいと思ふのであります。



New Year, 1945, finds the people of Poston with their faces turned once more toward the world "outside". Ahead is the return to normal living, re-establishment of real homes, and businesses. Behind are the heart-breaks of evacuation and the difficulties of adjustment to center living.

Friendships formed during life in the center are the finest fruits of that era. Many which will endure have been formed through membership in the Poetry Club, the activities of which have done much to keep alive the cultural interests of Poston people.

During the year ahead and those to come, may the same courage and friendly spirit which have guided you here remain with each of you. And may success and happiness attend you.



*Pauline Bates Brown*

Pauline Bates Brown  
Reports Officer

# 年頭の詞

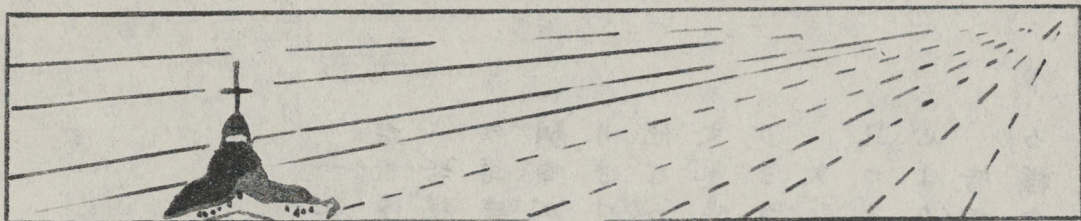
情報部長 ポーリン ベイツ ブラウン

一九四五年の新らしき年こそは、ポストンの皆様にとつては今一度面を外部社會に轉ぜらるべき秋ではないかと存じます。

皆様の前途には正常社會への復歸或は眞の家庭生活及びビジネスの再建が横はり、背後には立退の苦惱とかセンターの生活環境への馴順が、一方ならぬものであつたと言ふ生々しい事實が横はつてをります。センター生活から生じた一つの好き果實——それは友情に他ならないのでありますが、さうした尊い友情の果實を、皆様は又文藝協會の會員たることを通じて、深く／＼培はれてゐるのであります。

文藝協會の仕事たるや實にポストン全居住者の文化的水準を高め、且つその生々發展の途に資する所多大なるものがあることを私は衷心より信じて居ります。

皆様が今年も昨年と変らざる勇氣と友愛の精神の下にお進み下さる様念じ上げ、茲に御多幸を祈る者であります。



隨想

## 街頭の宗教

三谷眞種

△基督教の特徴は自己批判である。否、神によって批判せられる事である。今度の世界大戦が世界基督教界に及ぼした影響は革命的自己批判の擡頭である。

△最近のハーパー誌に掲載され米國知識階級及教界に大センセーションを起した記事はラッセル・シ・ストループの「米兵は教會を何と見るか?」と言ふ題の論文であつた。

米國大衆の横断面と觀られる一千萬の米兵達がもつ教會觀こそ、現代基督教界に對する痛烈な批判であり、同時に大衆の心にある宗教渴望の強烈さをも示すものであつて、この渴望を満し永遠の豊さを如實に體驗せしめ得る教會こそ新しい戦後社會を眞に指導する教會である。

△同氏の言葉によると、「兵士の觀る現代教會は玩具泥鳩座



待防止協會と同じカテゴリーに属する。又、「大部分の兵士にとつて教會は死滅し、葬られ、その墓石には苔がむしてゐるのである」と。頗る心細い現状であるが、同氏が軍隊附牧師として實戦に参加、多数の兵士達と生死を共にした體驗から生れた切實な自己批判の表現として觀過する事の出来ない眞實性をもつてゐる。

△血みどろな鬭争と限りない憎惡の暗夜に救を求めてゐる動亂の現代に光明を與へ、調和と希望の世界を示し得る宗教こそは、大衆の中に入つて、大衆と共に考へ、大衆と共に苦しみ、大衆と共に悲しみ、大衆と共に喜び、大衆と共に憂ふるものでなければならぬ。

△世界三大宗教として人類に大影響を與へてゐる佛、基督、回りの三教はみな街頭の宗教として大衆の中に出發した。文字通り辻説教によつて始まつたのである。然し今はその三つともが殿堂の宗教となり、街頭の大衆から切り離されつつある。識者の三考、四考すべきことではないか。(完)

# 開人の寤

苦竹庵

開人の寤みたやうだが、必要から貪しい文献を漁つたものゝ一部を記して見る。

## 三 皇

今から四九五四年程前、即ち西紀前三〇一〇年頃に漢民族が西方から河流に沿ふて東南下し、苗族を驅逐して、黄河の沿岸に諸部落を定めた。其後約百年西紀前二九一〇年頃に伏羲氏の盛時であつた。

神農が雄視は西紀前二七八〇年頃であり、黄帝が支那帝國を統一した頃は今から四五四四年位前で、西紀二六〇〇年頃である。

三皇とは、伏羲、神農、黄帝、又は包犧氏、女媧氏、神農氏、或は天皇氏、地皇氏、人皇氏等と云つてゐる。(支那上古に於ける有名な天子)私が知りたいことは、この三皇のツークロリスな年時であつた。然し伏羲氏の盛時と黄帝の威勢盛なる頃とは、凡そ三百年位の隔りがある。と云ふ程度にしか、權威ある文献上の結論は獲られなかつた。

以上は軒轅前に於ける自分が知りたいもの、一つである。

### 文字の起原？

「支那に於ける文字は、今を去る大略四千年前、黃帝の時、蒼頡之を作ると傳へらる。然れども其以前に於ても所謂結繩に代るべき不完全なる文字ありしなるべし。」

と一書に記して居る。之に依ると、文字は黃帝の時に出來たもの、やうである。然るに周易下繫辭傳には、

古者、伏羲氏之王天下也、始畫八卦、造書契、以代結繩之政、由是文籍生焉。とあり、「模範最新世界年表」(東京三省堂發兌)には、

「神武紀元前二二五〇年頃、伏羲氏の盛時八卦を畫し、書契及び甲曆を作り、嫁娶を制し、琴瑟を作る。」

とある。此等に依ると伏羲氏の時代に既に書契、文籍生じたと考へられる。

古者、包犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文、與地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情、作結繩而爲網罟、以佃以漁、蓋取諸離。

或は又、

上古、結繩而治、後世聖人易之以書契、百官以治、萬民以察、蓋取諸夬。等といふのを見ると又迷はされる。しかし

伏羲、神農、黃帝之書謂之「三墳」言「大道」也。

といひ、「三墳」は餘りに有名であり、伏羲氏の時に文字は出来たといひたい。さうすると一つ問題が起る。それは蒼頡の一件である。無論文字は蒼頡一人の作ではない。といふことは通説らしいが、鬼も角も蒼頡が鳥獸の足跡を見て文字を考案したと傳へて居る。ところが蒼頡は黃帝の臣なりと云ふ。伏羲氏と黃帝との年時は前節に記したやうに三百年位の開きがある。即ち依然として伏羲氏の時に文字ありきとしたいがどうもハツキリしない氣がする。そして結繩といふことも二様に使はれてゐるやうな氣がする。結繩文字で最も有名なのは南米ペルーだといはれてゐるが、アメリカインディアンも亦結繩や色分けの紙を用ゐたといふ。支那でも右の文献にもあるやうに「造書契以代結繩之政」といつてゐるやうに結繩文字が使はれたことは慥かであるが、伏羲氏の時に文字が出来たとすれば初め無論結繩文字を用ゐてゐたらうが、後には之を廢したであらう。或は両方共用ゐられたかも知れぬ。しかし文字が黃帝の時だとすれば無論この時代は結繩文字であつたといはなければならぬ。

そんなことは大した問題でもあるまい。要するに文字は今から四八五〇年頃から四五五〇年頃まで、即ち三皇時代に出来たのだといふことでいゝ筈だ。どちらでもいゝことを鬼や角とこの忙しいのに云ふことが關人の寤だといへる。

### 古文尚書の字體

モ一ツ寤を云ふて見ると、この節の表題のやうな問題だ。

秦の始皇が挾書律は餘りにも有名であるが、詩書、禮樂等の書を藏すること  
を禁じた令で、之を犯す者は族滅するとまでいった。

及秦、始皇滅先代典籍、焚書坑儒、天下學逃難解散、我先人用藏其家書于屋壁、  
即ち焚書は始皇の卅四年（西紀前一二一）坑儒は翌卅五年に行はれた。「先人」  
云々とは家語後序に孔騰、字は襄といふ人が家書、即ち家に傳はる書を屋壁に  
藏むと云ふて、竹牒といふ竹のスノコを韋で編み、それに漆で書いたものを壁  
の中にぬり込んだといふ。

ところが後になりて漢の景帝の末（異説あり）その子魯の恭王が孔子の舊宅  
を壞して、尚書、禮記、論語、孝經を得た。即ち

至魯、共王好治宮室、壞孔子舊宅、以廣其居、於壁中得先人所藏古文、虞夏商周之書  
及傳、論語、孝經、皆科斗文字、

と記してゐる。而もその字體は「皆科斗文字」と書き添へてあるので、その  
字體も知れて嬉しい。オタマジャクシ文字は漆書の場合さうなるといつてゐる  
が、蝌蚪文字は大篆以前の繪畫から符號に移るまでのものだ。

尚、挾書禁が解かれたのは漢の惠帝の四年であるから、この禁止令は廿二、  
三年つゝいた譯だ。そして藏壁の書が出たのは解禁後五十年位であつたやうだ。  
話は多少脱線するやうだが倍だからしかたがないとして、

字體の変遷に就ては現在のところ、九體あげてゐる人もあれば十三體乃至廿  
二體を並べてゐる人もある。字體の変遷は文物の進展と共に亦やむを得ないが

この出書の場合一ツの問題が起きた。即ち、

「皆科斗文字……科斗書廢已久、時人無能知者」と云つてゐるが、この古文は蒼頡の創作以來、周の宣王（西紀前八〇〇頃）まで凡そ千数百年間使用された字體である。

「藝文志」には武帝の末に壞宅と云ふ。之は誤りなり。

王充論衡には、景帝の末とあり。藝文志の武の字は誤りなり。

と云つてゐるが、大田錦城講の書経解題には、「其後、武帝（文帝の孫）の時、魯國孔子の舊宅壁中より科斗文字を以て記せる尚書を得たり。」

と云つてゐる。その問題は且て置いて、兎に角、武帝の末（西紀前一〇〇頃）に出たとすれば、古文が使用せられなくなつてから既に七二〇年位で、周の宣王の時に大篆が出来、秦の時代に小篆が出来、又隸書が出来てゐる。八分も當代であらう。すれば凡そ古文などに縁がなかつたらうから「無能知者」だったのが當然である。

それでも伏生から教を承けた孔子の裔孫孔安國が、この古文尚書を古文と隸との半分まぜに書いたといつてゐる。即ち、

以所関伏生之書考論文義定其可知者爲隸古定更以竹簡寫之

と、文字の創作以來今日まで已に數千年、字體も亦世と共に变化するのは當然なことであるが、現時字彙字典により今體を通じて晉體文字を知り得の恩惠は洵に有難い。

（終）



# 思想といふもの

谷川江浦草

今頃鯨を魚だと思ふ人はないであらう。が、それとても學問的に教へられてからのことで、若しさうでなかつたなら今以つて鯨が魚であると思つてゐたかも知れない。斯くとも外見だけではどう見ても鯨を哺乳動物だとは思へない。否さう考へるのが常識に生きる吾々としては當然のこの様にさへ思へる。併乍ら自然科学の分野に於ては斯うした誤謬は實驗或はその他の方法を通して防ぐことは至難ではないが、一度文化科學の分野に入るとそこでは主觀が尊重され事物の解明に適當な資料を缺く所より、稍こもすると不知不識の中に大きな見落しをしてゐる場合が多い。

よく言はれることであるが、東洋思想は西洋思想よりも優れたものである、例へばヘーゲルの辯證法の如きも、東洋に於ては既に大昔に稱へられてゐて賢首大師の事々無礙などに現はれてゐるではないかと言ふ人がある。成程、一見したところ両者は類似してゐる様にも考へられるが、問題はこゝである。どうせ人間であつて見れば洋の東西古今を問はず、その考へ方に大した差庭があら

う筈のものではない。それをイズムと言つた様な單なる抽象概念でその類似或は長短を云々するとするならば、それは鯨を外見のみよりして魚類だと断定を下すのと余り大差はないであらう。吾々は鯨を解剖してその魚でないことを知る様に、如何なる思想、哲學と雖もその歴史的背景を離して考へてはならない。斯く考へる事に依つて賢首大師は飽くまで佛教的であり、ヘーゲルのそれは基督教で両者の精神に大きな相違があることを吾々は教へられるのである。

日本人の神觀確立を望まれる湯淺博士の聲を聞きつゝ私はその様な事を考へた。博士は基督教の神觀が神道のそれと類似してゐる点より、後者を前者に置き替へることに依つて、日本に於ける神觀は確立される可能性があると考へてをられる。成る程、理論的には一寸その様に考へられぬこともないではなからう。天之御中主神はエホバの神であり、隠れ身の神及び現人神はカール・バルト等の所謂「隠されたる神」であり、啓示されたる神、若くはロゴスのインカーネーションとしての神とも當敷めて一應説明がつくかも知れない。併しそれは始めに述べた様に單なる抽象概念の問題であつて、所詮鯨と魚が同じだと主張するやうなものではなからうか。

思想の或は宗教の類似若くは合致が説かれる場合には、先づその歴史的背景が何よりも注意されねばならない。唯、外形が或は考へ方が同じだと言ふだけでは何の意味もなさない。思想は抽象理論ではなくして、事實の問題である。

従つてその思想が依つて立つ母胎が問題とされることは余りに當然なことである。數學の階級性が説かれ物理學にフランス的とかドイツ的とかの名稱が附けられる時代である。思想或は宗教の歴史的背景が看過されてよい譯はない。

基督教が西洋の文化の強烈なるギリシヤ生命主義をその母胎として持つに反し、神道は東洋の儒教精神をその生命として培はれて來てゐる。一方が知であれば、他方は行である。一方が舊約であれば、他方は古事記である。斯くこの兩者の歴史的背景に於ては相通づる何物もないのである。

嘗ては神道との苟合を狙つた佛家がその歴史的背景を無視しつゝ、本地垂迹説を以つて自らを立てやうとした。然るに今日に於てはS博士の如き基督者によつて、新版の本地垂迹説が唱へられ、又程度の差こそあれ、湯浅博士が同じ行き方を主張されやうとしてゐる。竹に木は接ぐべきでない。強ひて接ぐところに斯くの如き擬制が必要となつてくるのである。

博士の意味される神觀の確立は勿論日本を基督教國たらしめやうと意圖されてゐるのではないと思ふ。が若し日本人に基督教信仰を理解せしめ様とするなら、日本の歴史的背景を眞に知つてこの問題を考へねばならないであらう。昨年ホストンを訪れた世界的宗教家スタンレー・ジョーンズ博士がその著「印度途上の基督」に於て説くが如く、英米の衣を着た基督ではなく、日本人の心持に理窟なしに融け入ることが出来る日本の基督を降臨せしめ、日本の道端に於てその

親しく懐しい姿を現はさしめねばならないのではなからうか。

最後にこの文の結末をつける意味に於て、神觀の確立と言ふことについて今暫くペンを伸ばして見たい。

神道と云ふものをこれ迄は宗教として論じ、それに何等の定義をも加へないでこゝまで來たが、この点を今少し明確にして置きたいと思ふ。神道と言つても、こゝでは宗派神道を含まないことにするが、山鹿素行や熊澤蕃山は神道を聖人の道即ち倫理として説いてゐる。従つて神道は人道也で、神は人なりとの立場をとつた。後にこの神道説は宣長、篤胤より俗神道と罵られ、この二人に依つて神道は宗教へ立歸り、道教や印度のブラマ教は、吾が神の道より派生したものであると言つた風に説かれるに到つた。併し乍ら何れの説も歴史學の進歩した今日、色々と新しき角度より検討が加へられる様になり、「カミは上なりミコトは御事なり」との新井白石の科學的解釋が再認識され、漸次公正なる哲學者に依つて、神道は形而上學として深く掘り下げて行かれつゝあることが、最近の趨勢である様に思ふ。

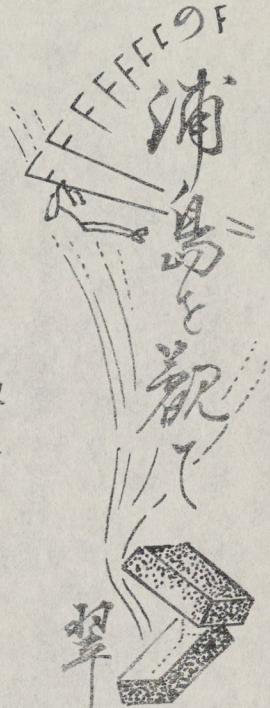
所謂神觀の確立は斯くの如く將來のことに屬するが、神道それ自身が國宗として存在することは、この形而上學的努力をも又全然別個のものとして考へさせるものであらうか。

(終)



後同助須磨  
浦島 (上)  
柳歸 (下)

# 勲須磨の浦島を觀



翠川 敏

カットン・ボールで「浦島」を觀ての飯途であつた。幾年振りかに胸が空くやうな好い心持ちになつた。煩瑣なバスに乘る氣にもなれない。折柄の寒月を浴びながら こつそり 第一へ徒歩るに決めた。

後方から 聲をかける人影があつた。振返ると 杖をついた古老……「よかつたですな。儂は此處に来て晩出たのが始めてす。効がありやしたよ。日本でも減多にや見られぬい浦島を 亞米利加で見れやうとはね。然し かう風が吹いたんぢや 師匠も崩には……」その昔若かつた頃 可成り見た人に相違ない。私は 暫し 茫然 とぼく 養老院へ吸ひ込まれて行く 瘦れ切つた後姿を 暗の中に立ち盡し凝視つてゐた。

事實 第二で踊つた浦島が最も好かつた。風も三晩の内が一番弱かつたしマイクの整調も好く 立の竹内さんも餘裕を附けて唄ひ 伊久美夫人の立三味も冴えて聞き頃であつた。大體 初日二日は無理 凡べて三日目邊りが昔から見所時となつてゐる。これは餘談であるが 紐育メトロのオペラでも カーネギー・ホールに現はれる演奏家にした所で 先づ 華府かバルチモア市等

試演してから乗り込むと云ふのも其れが爲なのである。

「浦島」を通俗に分ければ、花道七三、蝶々扇、玉手箱の踊り四つ。眼の

肥えた見物を買ふのは「七三」と「扇」である。師匠は「扇」を加減して踊ったと云ふて居る人と會つた。扇の揚げ方が低かつたと見た、僻目かも知れない。

實際の談、稽古場の時の半分位の高きで、扇が空に舞つたやうにも見えた。

若し、菊五郎がポストンに来て踊つたとしたならば、微細な中にも豪快味を

演ずる名優だから、アリゾナ廟も何のそののである。恐らく華美に二尺ばかりも揚げることであらう。而して、何度も落すであらう。其れでも、平氣な表情で拾

ひ上げ、揚句の果には帆掛船を作るに相違ない。純眞な藝術家、未だ若い

勘彌磨さんに、そんな藝當を注ぐするのは無理である。

花道七三の踊りが終れば「浦島」は済むだやうなものである。大概の所作

事には、踊手が出るまでに置淨溜璃と云ふものが語られ、見物に固唾を飲ませ

るのを常とするが「浦島」は出の「和田の原……」で、揚幕を潜る仕込みに作

られてゐる。（だから日本では大薩摩を使った場合もあった。）と云ふ次第で第四

舞臺の見物の多くが七三に辿り着くまで氣が着かなかつたのは遺憾千萬。勘彌

磨師匠も定めて同感であらう。筆者としても、皆に、液の上を渡つて来る浦島

を見せ度かつた。

玉手箱を開けてから「少し派手過ぎましたね」と言ふた人も見受けた。然し

「浦島」は狂言ぢやない。所作事だ。あれで大いに見態へがあり、巧いものだ。

なあと感じた。

何はともあれ 筆者が 勤須磨師匠の「浦島」に抱いた期待は 所作の上のテクニカル・ポイントではなく 以つと肉的な閃きに掛けられてゐたのである。「浦島」は至難な所作事に算へられてゐる。出されると聞いて 實は 吃驚したのだが 拜見して感心してゐたのである。どの角度から……？ 其れを迷へる前に「浦島」を中心として 日本演劇（所作事を含む）を廻る偶感を附して見たいと思ふ。

古老の言ひ分ではない。地方巡りの旅役者が 場末で出すものならはいざ知らず 藤間か西川の名取り（俳優を含む）が踊る浦島は 日本でも滅多には見られないのだ。何故かと云へば――

藤間勘須磨が踊った「浦島」は 文政十一年（今から約百三十年前 仁孝天皇の御代）江戸（東京）中村座の彌生狂言に 四代目中村歌右衛門（當時芝翫が出した七変化の所作事「拙筆カキナ、以呂波」の一つで 長唄の歌詞は其の前から傳はつてゐた地唄に手を入れたもの 作曲者は十代目杵屋六左衛門と云はれてゐる。七変化の中で 現今でも出されるものは「傾城」か「供奴」位となつた。中村宗家 成駒屋（歌右衛門）芝翫 福助（兒太郎）累代の家藝に占められてをり 所作は凡べて藤間か西川の両派に碎されるに過ぎず 花柳一阪東一若柳一等の諸流は 表向きには 立入れない掟となつてゐる。

日本古來の演劇は 決して限られた階級が享有する閑事業でなかつたことは

史上に照らししても明かな所であるが、桃山時代から明治にかけ、演劇を一つの贅澤物として取扱ふグループにより獨占されるやうになつたのは、主に徳川累代爲政者の放任主義が誘つた墮落に基いてゐるのだ。

明治の開國は、日本劇壇にも再建運動を興させることになつた。幸にも其れが成就した所以は、此の時代に三人の不朽な名優、九代目市川團十郎（成田屋）、五代目尾上菊五郎（音羽屋）、二代目市川左團次（高島屋）と、偉大な劇作家、福地櫻痴、坪内逍遙の両氏が時を同うして出現したからで、現代人は此の頃のことを「團菊左」時代と呼んでゐる。

九代目團十郎が案出した所謂「活歴」なるものは、古の武士が正課の一つとして修めた「舞樂」の演奏を心情の内に湧かす、斯の心から心への訴への、釋味を會得して編出したのであると云はれてゐる。「歌舞伎」の「妓」が「伎」に更められ「歌舞伎」と改稱されたのも此の頃であつた。

團十郎、菊五郎の相次ぐ他界後に訪れたのは、歌舞右衛門時代（今は菊五郎時代か？）この優は、型こそ異なるけれど、團菊左にも劣らない名人と認められて居り昭和に至るまで日本の技藝界に君臨し、威風は梨園を掃かばかりのものがあつた。従つて、成駒屋の家藝を習得するの機會は一般には與へられなかつた。よしんば、修めた所で發表する傳手が餘りなかつたのである。

勘須磨さんの「浦島」は五代目勘十郎の手解きになつたものである。亡くな

った藤間の家元は 名取りを許して間もなく愛弟子に質<sup>シズ</sup>ねた。あなたは 米國<sup>アメリカ</sup>へ何と何を持って行く積りですか――

飯米<sup>イハメ</sup>も迫った或る日 家元の呼出しがあつて 取る物も取敢へず駄<sup>ハ</sup>せ着けると 内輪ばかりの温習會<sup>オシラヒ</sup>が開かれてゐた。前以つて知らして貰へなかつたことが手傳つたらしく 聊<sup>シテ</sup>か溢つてゐると 更に失望せざるを得なかつたのである。自分に振られた役は後見だけ――

不圖 何氣なくプログラムを一覧するや 愕然 色を失つたと云ふ。曾て 質<sup>シズ</sup>ねられたまゝに 甘へて差出した「米國への家土産<sup>イエズト</sup>」が情誼<sup>ナサケ</sup>こめて並べられてゐたから―― 以上は 若い師匠の迷懷である。家土産の中に「浦島<sup>ウラシマ</sup>」や 羅府の名披露<sup>ビロノ</sup>目に出した 保名(清元)や 鏡獅子(長唄)等も入れられてあつたのは 敢て茲に云ふ必要もないことであらう。

思へば 意識してか 無意識の中にか 故人も優いことをしたものだ。實際の談 一民族の再認識に對する努力が 動<sup>ユ</sup>ともすれば 盲目的に取られ 反文化的に受入れられやうとする時 拙<sup>ツマ</sup>らない修交使<sup>セウケンヤ</sup>を派遣するよりは 偉大な舞臺藝術家を送つて 其の民族が有つ精魂<sup>タマシイ</sup>を直接舞臺の上に發露せしめた方が遙かに効果的であり有意義であるからだ。

一民族が有つ精魂<sup>タマシイ</sup>を 他の民族に表示する場合に於て 必要なのは學問による力ではない。求められてゐるのは其れ以上のものなのである。即ち 藝術の

靈感により暗示を汲み取る他の民族の洞察を求めるのである。伊太利が南歐の名花デュウゼを、佛蘭西がオデオン座のジミイを、支那が梅蘭芳を、米國に送ったのも、日本が左團次を渡露せしめ、菊五郎を紐育へ連れて来やうとした試みも、要は其の貴重な金駒を狙つたに過ぎなかつた。

勘十郎は勘須磨に「米國に行つて家元になりなさい。」と進言したさうである。申渡された本人が如何に意識してゐるかは知らないが、茲に重要な意味が籠めてあるやうだ。

由来「藤間流」は餘りにも保守過ぎると思はれるほど、峻嚴な鉄壁が牙城に環らされてゐて、偶々革新分子が出て、異端者として扱はれるのは斯界に定評がある。名取りであつた藤間静枝が破門され、新に「藤蔭會」を創始したのも、畢竟其の一例である。

藤間勘須磨は米國に生を享けた人。日本に渡つて先づ困つたのは、坐り方であつたらしい。日本映画を見ても判る所であるが、監督は俳優の立ち方から坐り方に至る動作をカメラに収めるのに、歐米に於ける其れ以上の苦心を用ゐてゐることが眼に着く。何故かと云へば、近代の日本人にも、立ち方から坐り方に至る中間に腰掛け方の振舞が生れて来たからだ。腰掛けから坐り方に至る動作は仲々完璧を期し難い。米國に生育した勘須磨が、立ち方から直ちにピタリと、棲の割れ目が出ないやうに坐り得るまでには、相當に苦心したと云

ふが 寧ろ 當然過ぎる程當然事である。

人に教へを乞ふ可き性質のものではないので 金春新道の銭湯に通ひ 新橋藝者が着る着こなしたを どん底から見直して會得した苦勞の持主。如何に凝り性とは云ひ乍ら 櫓の漕ぎ方を覺ゆる爲には 本枯吹く大川端に佇み 隅田を上る船頭を見詰めた人ではある。けれども 斯かる苦しい體驗と藝に對する熱誠さとだけを重ねた所で 藤間流の奥義を極めることは出来ないのだ。

「私は眞當に好運でしたの 元々「浦島」を教へて頂く機會などは到底御座いませんでしたが 或る日 稽古場でお待ちして居りますと 舞臺の方では 市村さんの御曹子（羽左衛門が息子家禰の身内か？）かと仰言る方が習つてお出になりました。不圖も 硝子戸を通して花道を見ますと 何とも形容の出来ないほどの神々しい淡影が漂ふて居りますので 御法度では御座いますが 自分を忘れ 吸ひ附けられて了ひまして……」 勘須磨が 波の上を渡る浦島の靈

感に觸れたのは 此の瞬間であつたやうだ。

勘十郎が 硝子戸一重の外に 光る二つの眼に意を止め 其の中に 醗酵された日本舞踊の情操を感受したのは 間もないことであつた。勘十郎は名人眼が高い 直かに浦島の手解きをしたと云ふことは 更に日本舞踊の精魂を掴むだ弟子を發見したことを意味してゐるのである。

「米國へ行つて家元になりなさい」と諭され 藝術街道を精進する勘須磨にも

悩みがある。修めて来た所作の發表よりも 自分が作つた「旅股物」のやうな  
 ものゝ方が受けて行くからだ。これで可いのであらうかと考へて居るらしい。  
 然し 勘須磨さんよ 今は非常時である。機械と剝那主義の現代も 何時かは  
 亦 生活はロマンスを結合して 人類悠久の門を切開くに相違ないからだ。其  
 れまでは 日本で會得した舞踊の精魂を固く保持し 折りに觸れ ポストン・  
 スコエヤ・ガーデンや カットン・ボールで示して呉れたやうに 日本舞踊の  
 真髓マズミを見せて貰ひ度い。勘須磨は 二世 筆者は必ず將來 日本で生れた舞踊  
 家でも到底達することの出来ない成果を 新しい角度から この國で擧げるで  
 あらうを確信する。亡くなった家元の論ロギンしも 蓋し 其の邊に籠めてあるので  
 はなからうか

第三館府の舞臺では 七三に目と鼻の所で拜見した。「今少し 華美ハミに踊らう  
 かと思ひましたが あなたが居られるので 出来るだけ地味に踊りました。」と  
 云はれ 華美な師匠の所作を見度い人には 甚だ濟まないやうな氣もしたが  
 筆者は嬉しかった。「あなたの流い踊の中から 幸にも 日本舞踊の精魂を會得  
 した人だけが發露する閃ヒラメきに接することが出来たから  
 古の武士は「劍を揮ふことではなしに 劍そのものであることを」其の理想  
 としたやうに 日本の古典舞踊を踊る人は「美しく踊るのが目的でなく 美し  
 く踊る精神を養ふことを主眼としてゐる」のである。鑑識ある人は其の發露を


親ひ尚美する。日本人が巧妙であつた段四郎（今の藤之助の父で故人）の勤進帳よりも重厚な幸四郎の演ずる方を好いたのも其れに由つてである。

遠き朗和より態々ポストンに來た勘須磨さんが杞憂なく妥協せず折柄の寒さも厭はないで鼻孔から白い重吹を吐き乍ら日本の古典物を踊つて呉れたのは嬉しかつた。我々としても思掛けない收穫を得たものである。其れにしても長唄囃子連中の努力を買つてやり度い。實に熱誠と云ふことは豪いものだ。よくもやつて下さつた。お世辞ではなく假令伊十郎や和楓が來て勤めたとしても當夜我々が受けたやうな真剣味溢れた感興は恐らくは湧かなかつたであらう。


天下の邊境然も沙漠の中で「浦島」を観る。洵に故郷志じ難しである。暫し身邊の累煩を忘れ人知れず泪を拭いた古老さへもあつた。實に「此の地尚ほ美し人たることも亦悦びのつなり」である。

舞踊の藝術的使命は言語の世界を越へ神秘的魔力を默示する通路に横たわつてゐる通路を越へて彼岸に到達する境は演劇の領域に属する。舞踊とは何ぞや？である。舞踊とは振りでもなければ型でもなければ休止でもない。其れ等は舞踊を構成する一部份ではあるが日本舞踊の生命は其れ等によつて描かれる空間にこそあるのだ。

見せびらかさなかつた勘須磨反めかした勘須磨に敬意を表す。



# ポストンを訪れて



渡邊美代子

ポストンに参りましたことはキャンブ内の一般生活が順調に運ばれてゐる有様でございました。神の力と人間の努力を合はせて、唯一つとして土臺のない沙漠の中に一通の町が出来ましたことは感心する外はございません。皆様が共同一致してお互に親切を盡くし合はせたお蔭で、今の様な愉快な平和なポストンが建設されました。全く日本人は神を敬ひ、人に親切を盡くし、又、物事に熱心な人種だと感じられました。深く考へて見れば、私共同胞がこう言ふ日本人の美点を社會に紹介するのが、私共の一つの義務であり、最も意義ある大きな仕事だと思ひます。

(筆者は勸業磨師匠の直弟子である。)

# ポストン生活

―自治への第一歩―

貴家もま子

日米開戦に因り太平洋沿岸全日系人の立退きが確實となつて以來、これに伴つて蒙る幾多の障害の内先づ第一は長年の奮闘によつて築きあげた各自の社會的地位乃至職業を放棄せねばならぬことに思ひ及んだ身心の勞苦であらう。開戦當時よりの様々な出來事と、加ふるに色々の流言は日と共に増加し、それが同胞社會到る所に乱れ飛び、爲に人心恟々として正に一大暗黒面の社會相を現出してしまつたのである。

その當時收容さるゝ同胞の措置に就ても、流言に惑はされた人々が、更に各自の想像をそれに加へて吹聴した爲に、全く根據のない流言と空想の產物

が恰も事實の如くあからさまに傳はつて行つたのである。

かゝる空氣の中にあつて、萬端の事象に對し略々適切な見解をもつた余程聰明な人々ですら、流言に對して半信半疑の惑ひに惱まざるゝ事柄も屢々多かつたのである。

愈々茲に入所してから、以前の社會とは全く一変した不自由なる生活の諸問題は別として、一日二日三日と経過してゆく裡に何とはなしに、各自の心の底に一つの不安の様な物がいつとは知らず自然に湧き出た。豫て敵國外人と云ふ極印を捺されて以來社會より蒙る諸種の壓迫の中に喘ぎつゝ在つて、各自が想像してゐたよりもこの收容所内にはある自由と云ふ物があつたからである。大方の人等が考へてゐたよりも遙に緩やかな束縛であつた。

入所の日、こゝは自治制でありますと先着の人から傳へられたその自治制な

る物は、先づ別表圖解の様な誠に立派なる  
膳立に基いて、全住民が未だ且て遭遇した事の  
ない異状なる特殊生活に因る新天地建設の  
第一よりその行動を開始したのである。

コロラド・リヴァー・ウオー・リロケ  
イション・プロジェクト・ホストン・  
アリゾナといふ新しい地名が生れた。  
この土地はインディアン・レザヴェイ  
ションの管轄區域で、次に示された三、  
四の部門を除く他の部門には、W  
R・Aからその主任として役員が任命  
されたのである。入所當時の一ニヶ月  
以内に在つては、これ等役員の内、数  
名は替る／＼異つた部落の食堂に於て  
住民の爲に講演會を催し、各々の職務  
上の範圍内に於て部落住民からの質問  
の應答などをなし、現在この地にての生  
活上の希望或は一般住民の心理状態など  
委しく知らんとつとむる如くであつた。

これ等役員たちの數回に涉つた講演

の要旨は常に一貫して、我等同胞が協  
力團結してこの特殊な新天地を如何に  
築き上げるかは一に我々同胞の手腕に  
因るのであるといふ事に歸着し、大に  
勵まし且つ色々に訓示された。

入所後程なく部落住民は自治制によ  
つて制定せられた。部落長及び市参事員  
各一名宛を選出して其任に當らせたのである。

これらの役員は何れも、二世つまり市民  
権所有者であらねばならなかつた。然し  
選舉權は一世二世を問はず、十八歳以上  
の男女悉くに與へられたのであつた。

右の規定に基いて第二部落が定めた  
部落長の指圖に従ひ、男女總出で道路  
のないこの沙漠の砂地に歩道の工事を  
開始して少しく歩き良くなつた頃、轉  
住局公報第一號が揭示板に出た。揭示  
板は食堂外側入口の壁である。

左にその寫しを示す事にする。

戰時轉住局公報 第一號

# 職業調査

今週より當ポストン地域に於て將來教育、娯樂機關設置及び行政上適材適所に起用すべく左記事項職業調査を開始す。

一、年齢 二、生年月日 三、婚姻 血族

關係 四、教育程度 五、職業 經驗

右の調査は將來身分証明ともなり、相互の文通、當地域外の對白人取引關係、子女教育、遺産相續等の記録ともなるものである。當地行政局は今後種々の方針を右記録に立脚し、最大限度に適材適所の實を擧げるを主眼となすものなれば正確なる記録を必要とする所である。右記録は行政局にて保存し、政府當事者のみの使用となすものとす。

諸君の援助と協力に依り、完全にして正確なる調査記録の作成を期するものである。

千九四十二年六月一日

ポストン地域行政局長

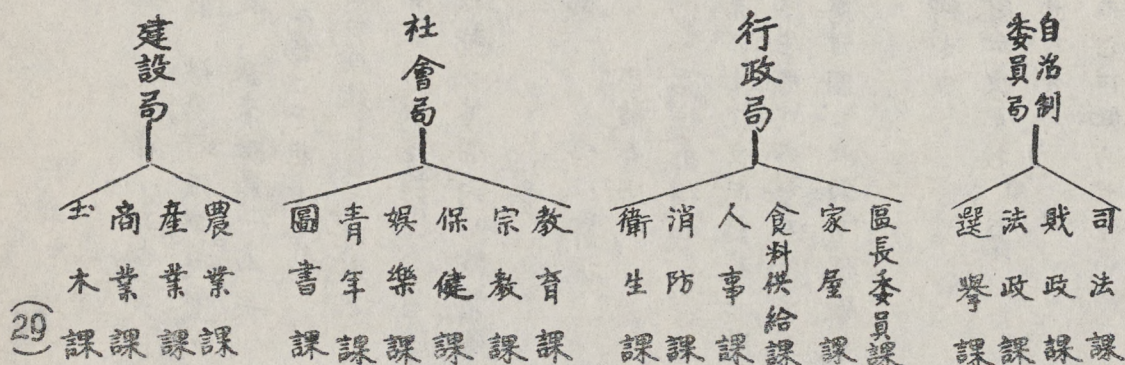
ウェイド・ヘツド

## COLORADO RIVER WAR RELOCATION PROJECT

Poston, Arizona

PROJECT DIRECTOR (建設主任)

MUNICIPAL COUNCIL  
市參事會九名



# 吟詩漫筆

大岡周洋

詩の力は世を教へ人を戒め、世を諷し嘲り是等總てに於て文章に優る数等である。誰か詩は閑人の閑文字なりと云ふ。

文章若し一代の人心を鼓吹し百世の光明とならば、其経國の大業にして不朽の盛事なり。

此度は漢詩と和歌との關係あるものを。

## 折楊柳

唐 楊巨源

水邊楊柳綠烟絲 立馬煩君折一枝  
唯有春風最相惜 慇懃更向手中吹  
なれて吹く名残や惜しき青柳の

手折りし枝を慕ふ春風。

古より忠臣義士の盛衰存亡をもて心

を変へぬに喩ふ。

## 燕子樓

唐 白居易

滿窗明月滿簾霜 被冷燈殘拂臥牀  
燕子樓中霜月夜 秋來唯爲一人長  
月見れば千々に物こそ悲しけれ

我身ひとつの秋にはあらねど。

是大江千里が樂天の詩を譯したるもの、其幽情婉怨は却つて原詩に幾等優るを覺ゆと。

## 子夜春歌

唐 郭振

## 陌頭楊柳枝

已被春風吹

妾心正斷絶

君懷那得知

江戸時代の儒者として文武諸藝に通じ人の師たるべきもの十六藝に秀でたりといはれた柳澤淇園は此詩を俚歌に譯して、

町のほとりの柳さへ

あれ春風が吹くわいな。

妾が心の遣るせなき

思ふとのごに知らせたい。

贈汪倫

李太白

李白乘舟將欲行 忽聞岸上踏歌聲  
桃花潭水深千尺 不及汪倫送我情  
棹させとそこひも知らぬわたつみの

深き心を君に見るかな。(紀貫之)

題道潛借菴圖

大槻盤溪

孤鞍衝雨叩茅茨 少女為遺花一枝  
少女不言花不語 英雄心緒亂如絲  
七重八重花は咲けども山吹の

みの一つだに無きぞ悲しき。

偶成

西鄉南州

幾登辛酸志始堅 丈夫玉碎恥靴全  
我家遺法人知否 不為兒孫買美田  
碎けても玉となる身はいさぎよし

瓦と共に世にあらんより(平野國臣)

八幡公過勿來関圖

野田雷甫

白旗風起乱春暉 邊境已驚龍虎威  
鉄馬不前関山路 落花如雪灑衣  
吹く風を勿來関と思へども

道もせにちる山櫻かな。

平泉懷古

大槻盤溪

三世豪華擬帝京 朱樓碧殿接雲長  
只今唯有東山月 來照當年金色堂  
五月雨のふり残してや光堂。(芭蕉)

泉岳寺

坂井虎山

山嶽可崩海可翻 不消四十七臣魂  
憤前滿地草苔濕 盡是行人流涕痕  
山は裂け海はあせなん世なりとも

君に二心わがあらめやも。(源實朝)

白河関

矢土錦山

都門早出向仙寰 路過青山紅葉間  
好與因公驛舊諫 秋風吹老白河関  
都をば霞と共に出しかと

秋風ぞ吹く白河の関。(能因法師)

貧交行

唐 杜甫

翻手作雲覆手雨 紛紛輕薄何須數  
君不見管鮑貧時交 此道今人棄如土  
落ちぶれて袖に涙の落つる時  
人の心の臭ぞ知らるゝ。

# 泥路で拾ふ

外川 明

銀色の小雨がしとくと降りそそいでゐた。

朝食を済して食堂から出て来た私は、泥濘路どろみちの途中でキャソリックの教堂と、

二人の尼さんとに出會った。薄墨色の尼僧の長い法衣は一入しとやかだった。

「グッドモーニング！ファザー アンド シスターズ！」と聲をかけたら、

「グッドモーニング！ミスター トガワ」と三人異口同音に應へた。そして、

その中の一人の尼さんが、「ワンダーフル・ウエザー」と附け加へて去ったので、

「私にはワンダーフル・ウエザーとは云へませんがね……」と笑ひながら云へば、

「キャンユー ヅー エニセング アバウト イット、ミスター トガワ？」

と微笑みながら振り返った。そしてそのまゝ行違ひに別れてしまつたのであ

るが、「あつ、一本参つた！」と心の中で叫んだのであつた。「此の悪い天氣があ

なたの力で何とかありませんか？」と優しく問はれて、初めてその尼さんが、

「ワンダーフル・ウエザー。」と云ふた言葉の奥が讀めたのである。

本當に私の力では如何することも出来ないこの雨であり、この天氣である。

どうせ如何にもならないことなら、何故にそのまゝ、「ワンダフル・ウエザー」

「有難い雨」と感謝する氣持にならないのか？と自分の心に呼びかけて、恥かしくなつて來た。日々の生活をそのまゝ感謝しながら、出來得る限り不平や不満は云はずに暮して行きたいと不斷に希ひ、努めてゐるつもりでゐたが、私の心は何時の間にかゆるんで、二三日降りみ降らずに續いたこの雨を、たゞ五月蠅い、鬱陶しいとのみ思ひ込んでゐたのである。

それだのにこの尼さんは、この雨もまた神のみこゝろと感謝しつゝ泥路を明るく微笑みながら歩いて行つたのである。人一倍美しい容貌を持ちながら、何故に尼僧になつたのであらうか？。清純の處女のまゝ素直に神の懷に飛び込んで行つたのであるか。それとも普通の女性として凡ゆる人生の悩みと苦しみと煩悶とを味はつた後に法衣を纏つたのかは知らないけれど、天地の一切を神意として素直に受け入れて、感謝しつゝ生きて行き得る心境に到達してゐることは、羨ましくもまた尊いことであると想ふ。

昨日ツラツクで数回運んで貰つた砂利の小山に、ザクツ！　ザクツ！　とシヤベルを突込んで、それを泥路の上に撒きちらしながら、東洋思想と西洋思想——似通つた「諦めの悟り」等のことについて、私はひとりとりとめもなく考へてゐた。傍の共同洗濯場内では、AさんとHさんが、日本風呂を作るのたと女つて、トン／＼と勢の良いハンマーの音を立てゝゐた。(一九四四、十一月十六日)

ポストン文藝詩壇

外川明選

雨の夜の祈り

牧さゆり

冷々と迫って来る静寂の夜氣に

訝々と澄んでゆく私の感情 私の心

燃え盛るストーブの火を見つめながら

そつと窓をしめらして降る雨音を聞きながら

ひとりで たったひとりで

教へ予達のことを偲って見たいのです。

叱ったあの子が可哀想になって来る――

すまし込んでお話を聞いてゐた腕白者が  
たまらなくいぢらしくなつて来るのです  
可憐ないたづらをする男の子等よ！

寒い朝な／＼を早くから

先生の家に迎へに来てくれる小さな女の子達よ！

風邪で二人も休んで淋しかった今日の授業――

宿題を忘れ来たのできびしく問ひつめたけれど  
憎めない小さながらの怠け者よ！

一人一人に呼びかけて 私

總ての児童にあやまりたいのです

努めても 努めても尚足りない

自らのおろかさをあやまりたいのです

教へ子よ！ 男の子達よ！ 女の子達よ！

四十三人が明日 無事に學校に来てくれます様に……

おろかな先生は静かな雨の夜に祈つてゐるのです。

自由律俳句

## ちろちろ赤い火

大月喜三郎<sup>キミラ</sup>

霜の深さを、ちろちろ赤い火になりはじめた  
厨の音も朝がめつきり冷うなつた、風  
コスモス倒れて咲いて静な雨があまだれする  
吹雪が吹きつけた窓が朝になり旭さしてゐる  
指にインクのしみて冬の目さしよる机の上。

自由律俳句

## 隕石の肌

河口幹逸

朝の、隕石の肌の冷たさを沁々とさすり  
枯れてしまへば只セイジブラシの原となる秋は  
沈む日に浮いて地平線の先きにある山  
労働と言ふても時間が来るのを待つだけの仕事で  
ラゲオがお話してゐるのも夜の深さなる雨音の冬。

詩

## 佳約者

マツイ・シュウセイ

栢野君と眞庭嬢との結婚式に臨みて。

ニュースにとよめく巷の人々

何時甞れるやも知れない戦雲の漂ひ。

でも堂内では平和の女神に抱かれて

これから出發と云ふ百年の佳約が結ばれつゝ

新生への行進曲が奏でられてゐる

静寂な堂内——— 厳肅な儀式———

集まつた老若男女の凡てが

今日の二人の門出に愛の巢のシーンを描く。

おゝ、新しい人生への旅人達！

悦びつゝ飲みほす 今日の記念盃

君達の前途に横たはつてゐる泥濘道にも  
轟々と鳴り響く破壊の音にも

そして血腥い戦ひの嵐にも

決して失望の溜息はつき給ふな。

破壊の後の建設———

辛酸の後の幸福———

静かに考へてほしい二人とも

君達こそは明日への建設の闘士である

黙々と進んでほしい二人とも

生への必勝を信じてつゝ……………。

あゝ、百舌鳥が啼いてゐる

生と愛との哲學を調べつゝ……………

教會堂の外にひろがる涯しもない秋の空。

一九四四年十月一日デバールの美以教會堂に於て。

# 黙想する脚

青木伸

實に仲の良い彼等である

彼等といふ私の両脚である

毎夜寝る時には必ず仰臥して

左の真脛に右のふくらみを重ねて

その日の疲れをぐつとのばす二人である

その睦しい姿のまゝで眠を覺ました彼等は

屋根を打つ雨音に聴き入つてゐる今朝である。

十五歳の春と十九歳の冬の長病なみやりに

得立てぬまでに瘦せ衰へたことのある私の脚が

渡米以来の廿五年を一筋に 健かに働き抜き

そして今日 この世界の大戦争の真最中を

アリゾナの沙漠の中の黒装長屋の内に

こんなにも ゆつたりと のび／＼と

生きてゐることが何だか不思議でたまらない。

それにしても すつきりとした脚だった  
昨日 部落外れの畑に下りて来て

全身をしとく／＼と冷たい雨に打たせつゝ  
何時までも／＼動きもせずに黙想してゐた  
寂しくも 美しかった鷺の一本脚……………。

その鷺の黙想の脚が聯想させる

西行の脚 芭蕉の脚 良寛の脚 達磨大師の脚

十字架上のイエス キリストの脚

沙羅雙樹下にゆつたりとのはした

涅槃の釋迦の久遠の脚……………。

一度 はつきりと死を覺悟してから

何となく軽くなつたやうな氣がする私の脚だ

明日のことは 一切明日にまかせて

今日一日を先哲の脚跡を拾ひながら

急がず 焦らず 歩んでゆかう。

# 新春句集

木村白嶺

表札は番舞のみや菊の宿。

短日やかれこれ多き習ひもの。

めぐり来し貯水池番や今日の月。

又一人寄り来し月のベンチかな。

物音の途絶えて月の收容所。

永井翠敏

ゑがきたる眉の細さよ暮れ早し。

懸崖菊門邊に咲かせ北湖庵。

あさなさ冷たき覺え髪結ぶ。

きゅつ／＼と鬼灯ならし答へける。

會ふて又別るはらから月の秋。

山崎玻璃女

今きゝしニュースはかなし月の道。

セラの月仰ぎ出所の心なく。

先づ吾子を思ひうかぶる良夜かな。

朝寒や呂集令狀逐に来し。

短日のまだ干ぬ衣を入れにけり。

土屋天眠

冲天に月まどかなり監視塔。

菊作る八十路の翁すこやかに。

高原の月に吠え交ふカヨタかな。

夜學校孔子の像を掛けてあり。

母達を生徒に夜學はじめけり。

山口牧村

誰れ彼の土産支度や日短か。

薄暗き土人の家や秋の雨。

ゆる／＼と牛追ふ人や花野原。

短日や野良より戻り濯ぎ物。

逸早く灯るシネマや暮れ早し。

山田耕人

へーの山わづかに青し秋の雨。

短日のアニオン並べ歩らず。

大霜や片翅のベッタ身じろがず。

逞しき日焼の男ホーを研ぐ。

山裾にかたまる山羊や秋の夕。

安田北湖

空室のふゆるばかりや暮の秋。

國籍に耐ゆる赤子や菊の花。

茨枯れて山河聲なく日没す。

大岩の頭を飲きとりて菊に揺ゆ。

軒端なる懸崖菊に月訪へり。

望月奇風

母と娘の教へ教はる夜學かな。

セラの月いつか吹雪香まれたり。

流車の窓見えつ隠れつ雨月かな。

小走りにメスへ行く人朝寒し。

兄弟のはげまし合へる夜學かな。

村上聖山

草中にいつ鬼灯のともりたる。

續き飛ぶ空の要塞菊日和。

山影の伸びきし庭や菊の花。

短日の選舉放送夜に入りぬ。

月暮し椰子の根下に戦友埋む。

小坂静子

砂糖少し足らずもうれしレモン水。

聲高に美しき娘の氷賣り。

猫遊ぶ軒の秋庭も初夏らしく。

風除の簾や木切や初夏の畠。

縁蔭や児を抱く母の若くして。

吉里竜耳

巖山は大きく晴れて初日出。

啼きつれて翔る鴉や初明り。

海かとも見へる山裾初かすみ。

鵜の餌に二三羽降りし初雀。

初風呂や三年越の知己ばかり。

関 五松

繕ろへし炭焼小屋や初時雨。

たま／＼に來りし友や夕時雨。

三重もあり沖繩言葉大根引く。

戦死傷しきりに殖えて秋逝り。

島本巽村

啼くカヨテ配所の窓の灯は凍てぬ。

冬ざれや廢るゝまゝの見張塔。

しよんばりと見張櫓や時雨月。

寒月や門衛の影柵の影。

ホストン  
文藝歌壇

永瀬 勇 彦



霜月歌會詠草集

(順序不同)

外谷 千代

ヴァイオリンの曲の名は吾が知らねどもその音<sup>ね</sup>まがなしくうらに沁<sup>しみ</sup>みるも。

日米の攻めひしぎあふ此の時に故國の名士の聲聞かむとす。(湯浅博士講演會)

祖國<sup>くに</sup>を思ひ同胞を思ふ熱辯はむら肝深くさし通したり。(同 前)

雨<sup>う</sup>後の庭の黄菊のつぼみほころびて今朝は一輪咲きそめにけり。

ネブラスカ 赤星 さと

十五夜の月に浮べる大學の塔ゆどよもして鐘なり出でぬ。

夕づきて電ふり出でぬひとしきりグリーンハウスの屋根どよもして。

グリーンハウスの温度守<sup>も</sup>りつゝこの夜半を夫<sup>そ</sup>に代りてボイラ焚く吾れは。

國<sup>くに</sup>を思ふ一途<sup>いちず</sup>心に雄々しくも吾子は志願して兵となりゆく。

清時文子

山登り

瀬をなして流れし事もありつらむ枯れ豁の邊に憩ひつつ思ふ。  
切り立てる巖壁の面に黄に光りて秋を狂ひ咲くカクタスの見ゆ。  
思ひきやこの動乱の世に逢ひて山登りなどして遊ぶとは。  
雨ふれば頭にしみる清しさのこの落着きをたのしみて居り。

クリスタル市 川原 八重子

濯ぎもの干しつゝ見上ぐる朝空に残れる月の光の幽けさ。

秋来ぬと思ふ静けさよ朝空に千鳥の聲の澄み透りつつ。

秋の日はうららに照れり電線にならび頻き鳴く黒鳥の群。

暮れなづむ夕べの空に呀え渡り明星と並び光る月のあり。

柳本 錦子

みごもれる妻を残して戦ひに海越えゆかす二世兵を思ふも。

夜雨はれて今朝吹く風はにはかにも肌さしとほす冷めたさのあり。

児玉 なを

書画展覧會録中 五首

萬紅葉かがよひ巻ける枯木の上に鶺鴒二羽をり羽根の美しき。

深窓に匂ふをとめか初春の苑に玉裳すそひき手鞠つき遊ぶ。

そそり立つ岩山と瀧布とを谿間より望みあふぐ人あり小さくし見ゆ。  
月を覆ふ雲にいどむや岩により怒れる虎の嘯ける顔。

シカゴ市 矢形 溪山

難木林の邊は朝霧深くこめたれば葦採る人か聲のみきこゆ。  
訪ふ人も稀なる日本庭園の赤鳥井落葉を踏みて吾がくぐり行く。  
うらなげき母は得堪えぬを召集令うけし子はただに口笛ふきてをり。

貴家 末ま子

千人針おくりて間なきその母にはやも戦死の報せ來たりぬ。  
吾れらつどひ戦死の君を弔へばまなこに浮かび御姿の見ゆ。  
由々しかる大戦の今を戀ゆえに君が生命は斬り断たれたり。(斬殺事件)  
咲くべきが興へられたる命ならむ伸びえぬ草にも小さき花あり。

内 堀 三太郎

朝露にぬれてつややけき茄子採りて吾はねむごろに箱に詰めをり。  
白菜の漬菜に副へていたゞけば今朝の茶漬は美味かりにけり。

大 空 魁

車窓の闇をたまやら薙ぎて消えたるは標識燈ならむ青かりにけり。(夜汽車)  
山の上にとまれるらしも車窓より闇の高處に青き標識燈の見ゆ。  
定かには窓より見えね湖ならむ闇の最中に赤き灯たゞよふ。

大園晴子

秋深み千草素枯れし野をわけて生花の材料か採る人の見ゆ。

堀川の土管の口や噴き出づる水は夕焼に紅く染みたり。

赤々と沙漠の果てに落つる日に大平洋の入り日偲ばゆ。

永瀬正臣

雨雲の去りたる空にさむざむと星の光は息吹くがに見ゆ。

おそ秋の晴れたる空に高々と消防稽古の水飛ばす見ゆ。

隣室に唱ふを聞かずなりにけり弟兵となりて行きしより。

北林静江

バスの上の征く子に老いの手をのべて見上ぐる母や姿いたましも。

い征く子を送り来たりて部屋ぬちに夫と吾れとはもの言はず居り。

朝な朝な通ふ道邊の草におく露しとゞにて霜のごと光るも。

友が活けしざくろの朱實色さえて會場の真中に人眼引きをり。(活花展)

川口静洋

とりどりの趣き活けむと弟子達のひたぶるの面を吾が胸を打つ。

教子の戦死の悲報手にしつつ而輪偲びて吾が泣きにけり。

戦死せし吾が教子の幼な顔一と夜偲ひて明しけるかも。

雨の日は必ず吾れを送りくれし汝にてありき戦死せしか今は。

## 池田愛子

逝きし弟の寫眞に話しかけつつ母は果物を供へ給へり。  
在りし日の弟の上僂びつつ母は語ります今日の忌日に。  
徴召れ征く其の子に今を一と目見んと名前呼びつつ馳せよる婦人あり。

## 年田静子

夜毎近く怖ぢてききつるカヨテ今は唯遠くして收容所も拓けぬ。  
アルファアの緑明るし雨あとの今朝を照る日のつばらみにして。

## 鈴木緑松

雨そそぐ庭の白菊ぬれそぼち花かたむきて零こぼしぬ。  
雨後の庭の日本茹子の實つやつやとあらはに光れりみ冬づく日に。

## 望月みどり

柿の實の赤きを見つつ故里の秋の夕陽を思ひるたりき。  
活花を學べとのらしおほらかに笑みかけたまふ君は親しも。(川口師)  
もの學ぶきほひ心も失せ果てつ身の衰へを著るく意識す。

## 赤松傳代

何地とも知れぬ戦地の兄君に妹の送りし菊の花はも。  
眼のあたり見る心地すも戦時下の日本女性のはりされる様を。(同前)  
けなげにも二世女性のさきがけとなりて雄々しく行かす君かも。  
(貴家キリノ嬢)

(湯浅博士の講演を拝聴す)

安井 静女

街路樹は眞黄に染みて梢<sup>えだ</sup>たかく見渡すかぎり日にはえて居り。

よべの冷えに澤水すでに凍りけむ今朝を南へ雁つらね飛ぶ。

里なれぬ小鳥の群れが軒近く怖ぢつつあさる冬さりにけり。

今年<sup>こゝろ</sup>も後一と月となりにけり假りの住るに落着かぬまま。

永瀬 勇

或日折角田中松香氏宅に招じられ山水の名画を拜見させて頂く、其の繪を題に、

初日光<sup>かざ</sup>明るき庭に眞乙女の赤裳裾ひき手鞠つくところ。

みすゞかる信濃の秋日夕づきて鴉<sup>カラス</sup>おぐらへ連れかへるところ。

ひさかたの天にそびゆる青嶺<sup>みきた</sup>呂巾<sup>みきた</sup>三段に那智の瀧落つるところ。

老松に目出度くかゝる瑞雲の奥處<sup>おくが</sup>ゆたづの群れたつところ。

## 歌會後記

今日は朝から時化氣味で晝になつても身を切る様な冷めたさのある風が吹き止まず、其の上今晚は待望の勤類磨師匠の「踊りの夕べ」が催されると言ふのでキヤンプ全体の人々が何だかそは／＼して落着を失つてゐる様にも見える。其れや是れやで午右の吾々の歌會は又出席者が少ないのではないかと内心心配しつつ出席したのであった。併しさうした憂ひはすつかり晴らされて、今回は十五

名からの出席を見、案外の盛會で誠に喜ばしい思ひであつた。諸君の熱意のあるところを見損つた此の愚かさをお詫びせねばならない。それと同時にお願いしたい事は今の此の熱意を一時的なものでなく何時までも持續して頂き度いものである。其うする事によつて始めて諸君の修練も積むし又同時に歌境も進んでゆくのではないかと思ふ。愈々寒氣に向ふ折柄故風邪を引かない様各々御注意されたく、以て斯道に精進努力あらん事を祈りつゝこの先筆を擱く。(永瀬)

## 古泉千樫の歌 数首

### 「冬」 籠

寒ければ朝寐あさみはしつゝ日日の飲食おんじきの時も定まらなくに。

冬の日の今日あたたかし妻にいひて古き硯を洗はせにけり。

寒の水にしづかにひたす硯石蒼き匂ひのいさぎよくして。

こがらしの風吹きすさぶ障子のうち咽おと急いそくしてひと日暮れたり。

冬日かげ一日あたるふるさとの廣き縁がはを思ひつゝあはれ。

おりたちて土ふむなべに心なごみ行きあるきけり日のてる道を。

右は大正十五年の作である。此の頃師は既に健康を害して居て、寐たり、起きたりで病狀もあまりはかばかしくなかつた。其の翌年即ち昭和二年十月初旬遂に師は逝去されたのである。右の数首を鑑賞するには、斯様な事も知つて置いた方がよい。以上作に對して理解がもてると思つて此處に附記した。(永瀬 勇)

## 選後隨錄

責任を時局にかりて迴避得んも良心の罪を何處にか償はん。

ありたけの二仙を出す醉客のあり草堂は苦笑みてトランスファーを與へぬ。

先づ第一番の作を見るに、何うも意味が充分に解せない憾みがある。つまり内容が明瞭を缺いてると言へやう。字面を追つての意味は解る様でも讀後の心に残る統一された感動と言ふものが受取れないので、唯空虚な思ひがするだけである。あまり概念が充つた爲め斯様な抽象的な表現にはなつて仕舞つたのであらう。尚ほ今ひとつ氣附いた事は上三句の表現法。これには多分に川柳の句法が影響してゐるやうに思へて面白くない。格調と云ふやうな事も稍々無視されてゐるのではなからうか。

第二首目の作に移るが、此の作は電車内の或るひとつの情景を報告したに過ぎないものであると思ふ。作の表面にも裏面にも作者の感じたものは微塵だに伺はれない。其處が物足らない。作者から言はすれば純寫生だから、と言ふかも知れないが、いくら寫生でも只輪郭だけ寫したのでは面白くない。何處にか作者の獨特な觀察の閃きが見えてこそ、始めて一首としての價值があるのではなからまいか。

その折は氣にとめざりしかの事も年経しけうに深く思はる。

どうも一首全体が抽象的に詠まれてゐて讀者の胸を打つと言ふ様な感じには乏しい。作の裏面には何か複雑した内容がある様だが其れは作者にのみ解つてゐて讀者の吾々にはさっぱり難解なものである。何んだか明星時代の、啄木の、其れも悪い方の影響を受けた作のやうにも思へる。現在の吾々はもつとはつきりと對象を眼前に据えて讀者をも同時に作者の心持ちに引き入れるやう、しつかりと力を入れて詠んで行き度いと望んでゐる。夢の中をさぐる様なものは、もう現代では古過ぎやう。

雨雲の去りたる空にさむざむと星の光は息吹くがに見ゆ。

寫生の歌である。併し此の作は輪郭だけ寫したものではない。良く作者の心眼が開けてゐて作者でなくては見られないところを見てゐる。即ち三句、五句が其れである。勿論斯ういふ前例はあるかも知れないが、此處では作者の物となつてゐて一首の中に有効に收まつてゐる。矢張り作歌の上に長い経験を積んだだけはあると思ふ。何をやつてもさうであるが矢張り作歌も其の例に洩れない如く神者でない限り、一年や二年でさう秀歌ばかり詠めるものではない。屢々言ふ事であるが此の道は生涯のものである。

謹賀新年

本年もお慶び  
愛顧の程願ひます

専門家の作る優秀品揃  
日の出印

赤唐漬 紅生姜 梅干  
紫唐漬 茄子 辛子漬

氷を入れた  
おでも生える 素麺

評判の  
特製 干麴

DENVER PRESERVING CO.

2232-36 LARIMER ST.

DENVER 2, COLO.

Modern FOOD PRODUCTS CO

謹賀新年

花印  
醬油  
佃煮類  
梅干

えカーネーション印  
干鰯

MENCHANG

味の素

梅屋センベイ  
其他日本食料品

モダン  
食料品商會

ボ  
ス

シカゴ市

同

ミシガン

ツ  
ル  
レ  
ー  
キ

同

同

ミネドカ

デ  
ン  
バ  
ー

マ  
ン  
ザ  
ナ

第三館府

第一館府

同

同

同

同

北  
村  
子  
守

文藝

# 祝

# 吟

柳壇

忍従に三ツの齡を早重ね。

門松がなくなるとも目出度い收容所。

初孫を抱いて喜ぶ年の朝。

今年はと祈つて披く初曆。

野も山も笑ひに満ちて初日の出。

故國の聲柵一ばいに春の酔ひ。

還曆に老妻と自肅の雜煮餅。

肅然と祈る平和を初日の出。

出征の子在處も知れず鏡餅。

征つた子が席安全に春の膳。

初日の出平和間近な空の色。

元日を内輪で祝ふ三年目。

動乱へ一家揃ふた雜煮箸。

國恩へ感謝の籠る袴の音。

收容所正直なのは松を立て。

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

谷本晚香

井上二葉

鈴木縁松

関五松

鈴木胡仙

稲垣秋月

稲垣牧東

屋野光葉

松谷縁泉

河嶋次彦

吉村芳乃

橋本白砂

森岡春山

黒田眞鶴

島原潮風

第一館府

## 第五拾貳回 柳句會

課題「頑固」

清水迷舟選

天

吉里竜耳

環境が頑固にさせた煙草の輪。

評 事変動發以來理由をつけて、太

平洋沿岸から獨、伊以外の敵國人

は全部奥地に移動させられて以來、

約二ヶ年半多数の中には環境によ

つて、相當かたくな心に覺つてゐ

人もあらう。昨今の沿岸帰還説に

「誰が何んと言つたつて此キヤン

プから出るものか。」とかみ返つて

パイプ煙草を一服した場面が想像

来る。言ひ古された「煙草の輪」も

此場合極めて効果的である。

地

吉村穂村

反對の一人に更ける議長席。

評 唯一人の頑固な反對者の爲めに

満場一致と云ふわけに行かぬ議案

へ議長の苦勞がある。

人

塩出大州

孫だけへ御意のまゝなる頑固爺。

評 嫁の腹を借りて授かつた可愛い

孫だけに流石の頑固爺も破顔の連

續。平凡なれど「頑固爺」を捉へた十

七字の同想句中より此の句を推す。

五 客

脇地開水

一徹の果が落伍の群で老い。

早川喜美子

信念を貫く肚へ人の口。

塩出大州

識られる頑固と別に生字引。

斎藤一流

好い腕を褒めて頑固は惜まれる。

鈴木胡仙

片意地を通し孤獨の箸を取り。

佳吟

六十の頑固自慢にして話し。

虎山

頑固だと言はれる過去の落道。

同

変人にされて頑固のまだ一人。

同

座りたい椅子を拘ねてる頑固者。

縁松

一徹な親へ蕾のまゝで枯れ。

胡仙

一徹な父も配所で少し折れ。

桂馬

純情の妻に済まない意地を張り。

穂村

感情のもつれ淋しく意地を張り。

一流

意地づくになつて讓れぬ朝を起き。同

正論を吐けば頑固な者にされ。

閑水

言ひ出してからは自説を枉げぬ父。

狂月

間違と知つて、尚も我を通し。

同

かたくなの心淋しい雨の音。

貴季

商談も頑固が過ぎて纏らず。

光葉

経験の自論は枉げぬ善後策。

竜耳

枉げられぬ意地へいきなり席を立ち。笛水

意地張りへ世間の人が遠くなり。

軟葉

軸

老人の頑固割引して聞かれ。

投吟百五句中二十五句の嚴選

御多忙中の清水迷舟先生に選をして貰

つた事を感謝します。尚力作に加筆せ

し事は御寛恕ありたし。

(潮風)

第五拾参回川柳句會

課題「雨上り」 島原潮風選

佳句

踏れと見た母で賑ふ洗濯所。

牧東

飛び込んで来る泥靴に母の聲。

同

陽の恵みハッキリ見せて雨上り。

巴水

一角に虹を見付けた雨上り。

同

雨上り母追つて来る三輪車。

光葉

雨上り後を頼んで里に出る。

同

泥靴の弟叱る姉の聲。

里江

雨上り俄に忙しい洗濯所。

里江

雨上り洗濯場の世辭の良き。

白舟

雨上り一入秋の季を添へる。

桂馬

雨上り霜氣遣ふて花に履。

狂月

雨上り濯ぎ忙し子澤山。

竜耳

美しい虹を残して雨は止み。

同

雨上り朝日一つばい深呼吸。

春山

雨上り目に新しい芝の色。

同

雲割れて心も晴れる虹の色。

孫六

鶏の音もはつきり響く雨上り。

同

ぬかるみに母すかしてゐる幼稚園。

子守

雨上り俄につどろ洗濯場。

静江

日曜日プランが変る雨上り。

時子

増収の鎌の愉しい雨上り。

同

雨上り濯ぎに忙し子澤山。

秋月

雨上り陽のさす屋根に鳥の聲。

芳乃

遠山も眼近に迫る雨上り。

同

雨止んで林静かに聞く小鳥。

晩香

雨晴れておちこち響く下駄の音。晩香  
沙漠にも池が殖えてる雨上り。貴季

軸

洗濯の順番を待つ雨上り。

「雨上り」の句には文と思ふ句もなか  
つたので七十五句中佳句として二十  
七句採つた。(潮風)

第五拾四回川柳句會

課題「今日」

島原潮風選

天

遠水白舟

柵慣れて今日を樂しむ笛の音。

地

稻垣牧東

國論の是正の今日へ鉄甲。

人

難波桂馬

明日はなき仕事に殖へる登録者。

五客

徒食して又も焚きすだけの今日。

峯月

今日中に迫る思案を持ち歩き。難波桂馬  
宿命の今日を契つて二人連れ。速水白舟  
ちりぐの家庭淋しい暮の今日。藤井孫六  
今日此所で明日は何處で月の歌。小町春奉君

佳吟

今日は又明日へ踏み出す基礎工事。天眠  
今日も亦裸に過ぎぬ日を終り。白舟  
積年の忍苦へ光る今日の倅。峯月  
飛躍する明日を夢みて暮らす今日。同  
今日も未だ無事で居ますと軍事使。牧東  
今日からは已もババかと一すてれ。同  
今日もまた静かに暮れる柵の冬。秋月  
今日の役努力を積んだ廻り椅子。同  
中心が揃ふ一家の今日の倅。桂馬  
エバテート社長も今日から收容所。子守  
母一人今日も指折る子の便り。同  
今日からの新生活へ荷を纏め。光葉  
再移住今日が名残りのキャンプの灯。同

雲行を眺める今日の洗濯日。緑泉  
遺子の歳数へる今日の記念祭。同  
儲口聞き流して今日も暮れ。孫六  
日本画の今宵氣遣ふ空模様。かもめ  
今日は今日明日には明日の幸があり。天眠  
朗かな人生今日の喜を祝い。奉君  
将来の希望へ今日も汗を拭き。晚香  
今日もまた奉仕へ急ぐベルト締め。同  
今日ぎりで後統制の巻煙草。緑松  
今日からを馬鹿で暮らすと肚をきめ。静女

軸

今日も又香氣に暮らす收容所。  
蓬着今日も亦徒然に暮れた轉住所。芳公  
いたつきに屈託のない昨日今日。同  
活花などに通つて各氣な昨日今日。同  
次回課題

『歸還』 三句吐 締切四十五年一月廿日

『奉仕』 三句吐 締切四十五年一月廿日

川柳互選句

課題『緩む』

(十二月十日の句會)

稻垣牧東

6 民族へ疑惑の緩む血の犠牲。

吉里竜耳

4 鉄柵が少し緩んだ三年目。

谷本晩香

4 生活に保証されてる氣の緩み。

島原潮風

4 落ちさうなパンツ抱へて子が歸り。

稻垣秋月

3 緩む氣を再轉住へ締め直し。

2 潮時を逸した寄附へ氣が緩み。牧東

2 よる齡に勝てずベルトに穴一つ。五松

2 全快の夫へ妻の氣が緩み。里江

2 清算をすまし緩みの日向ぼこ。晩香

2 積算も次第に緩む齡のせい。二葉

1 轉住の重荷を下す裏長屋。

汀村

1 入所して次第に緩む皮ベルト。

同

1 全快の日も近づいた氣の緩み。

時子

1 古荷の釘の緩みに引かける。

里江

1 鉄柵の外へく〜と太い聲。

五松

1 長生へ心緩めぬ持つ覺悟。

秋月

1 釋放に備へ緩めぬ生活向き。

同

1 張り詰めた池の氷に朝日さす。

二葉

1 メス卓で禁煙犯す人も出來。

以上 竜耳

川柳互選句

課題『初』(十二月十日の句會)

山西里江

7 初對面互に肚をさぐり合ひ。

津村汀村

5 初年生母にブックを讀んで見せ。

関 五松

4 初旅へ母は寝られぬ夜が續き。

4 初物の味覺キヤンプの隣組。 安元時子

松谷綠泉

4 休暇兵家内始めて笑ひ聲。

稻垣牧東

3 初春へ押へ切れない良い氣持。

2 初日の出三度も無事に屠蘇祝い。 綠松

2 初孫へ冬着を送る年初め。 同

2 假宿にほの／＼登る初日の出。 汀村

2 書初めの色紙粗末な墨の色。 時子

2 吹く風も初春らしい匂する。 同

2 年賀狀無沙汰も説びて友へ出し。 晚香

2 初霜も知らずに過ぎる住心地。 牧東

2 初顔が見えて娘が席を立ち。 綠泉

2 元旦も同じ陽かと空見上げ。 里江

1 初めての山に日暮れて戻る脛。 竜耳

1 初めてのバない証據には腕のさえ。 同

1 一年の計りを立てる年始め。 二葉

1 初日の出祝ふ聲々鵲と亀。 二葉

1 初孫を抱いて母親腰が延び。 汀村

1 初物に七十五日生き延る。 潮風

1 初春を拜みに起きる朝寐坊。 同

次回句會宿題 以上

「意氣」 来る一月十四日の日曜日。

出来得ますならば玉吟一月十二日迄

に私宅へお届け下さい。 潮風

## 近 什

シカ市 矢形溪山

ネクタイをつけて日曜サテ晝寐。

失業へモ少し穿かう靴の裏。

柵を背にしてから惚ぶ友のよき。

愛犬に生れ鎖につなされる。

弔詞だけ聴けば佛の様な人。

鈴なりの電車に次を待たす年終。

牽き船はまだ見えて居る海の荒れ。

# DENVER SAUCE CO.

MANUFACTURERS & PACKERS

FAMOUS HANA BRAND FOOD PRODUCTS

3206 DOWNING ST. DENVER 2, COLO.

謹賀新年

(花)  
印醬油

コロラド州デンバー市

傳馬醬油会社

(花)  
印梅干


本年も相愛うす  
御愛顧の程願ふす

Compliments  
of

NATIONAL GROCERY CO.

MESA, ARIZ.

WHOLESALERS - QUALITY GROCERS



## 質問回答

思ひ出しても恥かしくなるやうな失敗談。

(二) 貴下が一番嬉しかったこと。

(三) 貴下の御趣味は何ですか？ その天狗談は？。

本誌新年辨を飾るべく、各方面の方々に以上三ヶ條の質問に對し、御回答を御願ひした處、以下の如く多数の方々より御回答を頂きました。御多忙中にも関わらず、御回答下さった諸氏に深厚なる謝意を表します。

(編輯部)

(到着順)

谷本晚香(28)

(一) 吾輩の過去の失敗談を告白する。思ひ出せば一九二三年九月一日関東震災のありし翌日、友人四人佐藤君所有の自動車に乗り、葡萄産地フレスノへ向つて耕曉羅府市を出

發した。途中有名なるベカスフ井ルドの山脈を越え、宏望千里中加の原野を眺め、南加農業經營とはすこし規模が違ふ様に感じた。夕方漸く館府へ着き、ボースに照會された。翌日は葡萄摘採に従事、各々の友人は葡萄ラ

インへ這入りバリ／＼招めた。吾輩もスタートした。僕の両側のラインは濟んでゐるのに木にはグレップが残つてゐる。ピースウオークとはこんな事かと僕に印象を與へた。然し惜しいと思ひ全部綺麗に採つて、恰度四、五

十ツレー採つた時にボースが来て、「君は葡萄採りは最初か。」と尋ねた。「いや、僕は八年許り遣つて居る。」と言ふと、「之は二番葡萄であるから、一番と一緒に入れて貰ふとドライしない。」と彼に言はれ、友人共には笑はれ、其時丈々は僕も冷汗が出たのである。其後吾輩はブラフを止めた。

松岡(二)

(2) 中村君は中年の人で元氣に満ちた働き盛りである。目下鵜湖に居る友人が永らく病氣と聞き、親切な彼は驚三匹送つてやつた。處が此友人は自分

が信ずる宗教の立場から無益に生物の命を取らぬ信念で、暑い所から来た驚を寒い日はストーブの傍に、暖くなると外にと、此夏まで養つてきた。彼は考へた結果、「何卒彼等を元の淵に放つてくれ。」と中村君の所に送り返して来た。それは暑い夏朝、中村君はコロラド河の岸に立つて居た。サツクから亀を出して、丁度人に物言ふ如く「是がお前達の元の家だ。人に見つかうて捕まるなよ。」と放ちやうた。亀は喜んで水中に見えなくなつた。あゝ良い事をしたと中村君はシガレットに火をつ

(二)  
け、ふと水面を見れば何と今放つた三匹の亀が首を長く出して彼を見て居るではないか。丁度御禮を言つて居る様に、一寸の虫にも五分の魂と言ふ事があるが、ほんとにだと思つた。それ以來中村君は亀を捕る事が嫌になつたと言ふ。是は私が聞いた中で最も美しい嬉しい話の一つである。

外國隆英(53)

(1) 學生時代の或日、丁度その前夜は病人の看護で徹夜をしてゐたのですが、谷本富博士擔當の教育學概論を聴いてゐました。午後の太陽が氣持よい位

照り込みます。つい良い  
氣持になつてグツスリ寝  
入つてしまひました。二  
時間の講義はいつか終つ  
て廣い教室には猫の子一  
匹ゐない静寂さにかへつ  
てゐました。「シマツタ!!」  
と思つて頭をあげて見る  
とノートブックの上は涎  
でいっぱいです。而もその  
涎のほとりには「お目ざ  
めになりましたらおたち  
より下さい。」と皮肉タツ  
プりのことが書いてあり  
ます。それは間違ひもな  
いその時代、女子大學卒  
業後入學してきた〇〇ハ  
重子嬢と言ふたつた一人  
の女學生の筆跡でした。  
(2) 三年六ヶ月病床にあり

醫者から死の宣告を受け  
た母の病氣が、私の勧め  
た茄子とホーヅキを煎じ  
て服用し全快してくれた  
時。

#### 竹本清藏(14)

(1) 思ひ出してても恥しくな  
るやうな失敗談は何れの  
場合も酒の上の失敗であ  
りますが、最近もある所  
でした。か御馳走になつ  
た上、部落の友人宅で婦  
人達ばかりのさゝやかな  
集りの席へ顔を出して、  
一人で騒いだ事を翌日喜  
から聞かされた時は本當  
に顔から火の出る程恥し  
い思ひを致しました。  
(2) 面白い目には随分遇つ

て暮しましたが、忘れら  
れぬ程嬉しかつた記憶は  
ありません。

(3) 芝居、水彩画、日本舞  
踊、社交ダンス、かるた  
等々、多趣味と言へば體  
裁はいゝですが、何れも  
下手の横好きの域を脱せ  
ず従つて天狗談なんても  
のはありませんが、嘗つ  
て榮港晚星館に於て小山  
内薫氏の原作「息子」を  
上演し、自らその先父を  
演じた時は自今乍ら良く  
出来たと今でも時折その  
場面を思ひ出します。

#### ハート雪嶺 阿世賀紫海

(1) 今年八月下旬頃だつた。  
私等の就働してゐるパツ

キング會社へ突然來訪されたのは俳人左右木章城、塩澤汀二の両氏であつた。初對面の嬉しさに洗面の暇も惜しく尾崎和榮女史と四名連れだつてオクデン市内へ食事に赴いた。それは良いとして問題は私の服裝である。着物は勿論頭上から靴先に至るまで桃の汁や皮等に汚れ、而も上天氣の街上を汚れたまゝのラバブーツを穿ちボツソリ／＼と、盛裝の両氏の後に隨行した。析りも悪しく目差すカフエーは修業の爲に本日休業の張札、次の洋食店は定期休業のサインにウンザリし乍ら賑かな通り

を十数丁歩き廻つた。行交ふ人々は振り返つて私の身邊に注目の眼をそゝぐ有様に、私は顔面から火の出るやうな恥かしさを感じ、今に到つても追想すれば顔のほてる思ひがする。(2)ユタ州ブリガムの草庵から塩湖市へ赴く朝だつた。大道を出てバスを待つ間に通過する自動車に注目した。一番車は同胞二番車も同胞であつたが顔を見合せ乍ら馳去つた。三番目の自動車は米人であつた。彼は車を止め、南方へ行くなら乗車せよ」と私を招き乗せた。車中雑談のうち共に塩湖

市へ往く事を喜び、私の行先き重松氏宅前まで態態送つて呉れた。私は其厚意を謝し聊かの一封を與ふれども彼は頑として受取らず。止むなく住所姓名を貰ひ、後日彫刻の一面を謝禮に贈つた。要するに百哩足らずの賃金は兎も角として人の情である。奇しき因縁の下に敵味方の地位にある現時に於てこの親切は旅にゐる者の殊に深く感ずる印象である。盡す可きは真心からの親切であり、謝すべきは人の情に對してである。

(2)夏休暇に東京から瀬戸内海の神島まで歸り、程近き郷里から妻を招き、海水浴場で閑日月を送つた時の或日の午後、妻と其友の二美人を小舟に乗せ、私が櫓を漕いで島の一周を試みたのです。静かな海、島の松、面白い岩、長き日を舟で暮した事は良かったが、夜に入り家路を漕げど舟は進まない。動ともすれば流されるのです。熟く考へて見ると引潮に逆進して居るので、幾ら漕いでも甲斐なく、疲れ切つたが代人としてないのです。私

等夫妻はどうなつても可いが、他の兩人は必ず岸に着けねばならぬ責任がある。併し別に良い方法もない。潮は愈々濃く、浪は益々高く、風さへ吹き荒び、舟中は沈黙が深くなる許り。遂に櫓も波濤の余勢に疲勞し盡した手より奪はれて、アツと言ふ間もなく暗に消え失せた。萬事窮す。「あゝ神よ願はくば二人の淨き女性を救ひ給え。」祈る折しも迥かの海濱に澤山の提灯が頭はれると同時に、松明を振照した一艘の舟が矢の如く飛んで來る。有難い！救はれたと思つたその刹那。

(1)回顧すれば今より二十有餘年前、第一期世界大戰を背景にして持上つた軍需景氣の波は澎湃として北米大陸の天地を掩ひ、時恰も經濟界は通貨膨脹の波に乗り、金融界は宛然洪水状態に陥つた。當時羅府の小東京では勿驚一と口の掛金大枚一百兩と言ふ頼母子講が流行り出した。よせばよかつたのに友達に勧めらるゝが儘に、手を出したのが病みつきで、とう／＼歸朝用意に蓄へて置いた虎の子を、根こそぎフイにして仕舞つたなどは、今か

ら考へれば自分の在米生活五十年を通じて、記憶に存する失敗誤中の最も著名なものであらうと思ふ。

(2) 帝國衆議院議員第二回目の總選舉の時であつた。候補者に立つた同郷人某の運動本部の一員として、各方面に運動を開始し、募集し得た投票は巨大の數に達した。其の功績を賞する意味で、本部から謝禮金一封を與へられた。夫れに依つて自分の米國渡航費の大半を補ひ得た事は、最も嬉しかりし當時の思ひ出の一つである。

(3) 自分の趣味と申せば、先づ文藝や骨董、陶磁器

の類は随分多額に達してゐる。立退の際には是等愛藏品全部を箱詰にして、米人經營の倉庫會社へ保管預にして來てゐるが、生命から二番目の物として日頃愛翫して居た美術品に離れて收容所内で住んで居る事の辛さは、眞に言語に名狀し難いものがある。

### 稻垣牧東(19)

(2) 貳拾年來經營を續けた事業が愈々行詰つて仕舞つた丈けでなく、將來も先づ絶望と言ふ誠に悲惨な事態に立至つたのが恰度私の五十歳の折でした。人生は五十と言ふ其歳に

私は死の代りに全財産を投出して來だ足らず、友人からの恩借二萬四千弗が残つたのでした。元來可なり無鉄砲な私ではありましたが、年既に老境に入つての此の負債です。さすがに此時丈けは懊惱苦慮眠れぬ幾夜さかど續いたものでした。實際恰度カレッジを卒業して居つた息子が、

「お父さん僕も居ります。二人で此度責任を果します。」

と言ふて呉れた時程、予を持つた嬉しさを痛感した事は在りませんでした。

(3) スポーツは何でも觀るのが好きです。

自分で試みるものでは  
川柳を教はつて居ります。  
素質は無い様ですが面白  
いと思つて續けて居りま  
す。

### 眞陽日章(二)

(2)私は歸米後間もなく自  
動車の衝突をした。勿論  
運轉許可証なんて持つて  
ゐなかつた。けれども、  
警察沙汰にするほど大き  
な事件でもなかつたし、  
ぶつ突けて來た相手も日  
本人だつたから、示談で  
済んだ。私は運轉許可証  
がなく相手は酒を飲んで  
ゐたから両方とも言ひ分  
はあつたのである。だが  
さうした譯で私はつい運

轉許可証をとらねばなら  
ぬやうに余儀なくされた。  
私は困つた。英語なん  
て全く解らなかつた。そ  
れで英語の解る友達と、  
私は未定年だつたから親  
父とを連れて出掛けた。  
胡魔化せるものならとい  
ふ氣持もあつた。が、そ  
の結果は見事落第であつ  
た。向ひ合せの比島人な  
んか六回目だといふのも  
あつたので、それで窮屈  
な脅威慢が出来た。  
次の十五日目に再試験  
するやうに一枚の紙片と  
ライセンス案内書を掴ま  
されて私はほと／＼弱つ  
た。英語の解らない私に  
いつまで経つてもパスす

るやうな見込みもなかつ  
たし、私は冷たい試験官  
の氣持を憎く思つた。

十五日目が來た。今度

は試験官が變つてゐた。

私は試験をうけた。親父

達は係官と談笑してゐた。

私は意味の解らない質問

書に答案を書くのに談笑

などしてゐる人達を詰ら

なく思つた。すると、暫

くして「もうよい。試験

せんでもいいさうだ。」と

親父が言つた。間もなく

一枚の紙に署名すると私

達はそこを出た。扉を開

める早々父は、「實はね、

この間の係官は自動車の

衝突で入院したさうだ。

今夜のはその替りに來

てゐたのだ。それが實に奇縁なんだよ。お前が子供の頃、毎朝しぼりたてのミルクを持って来てくれてゐた少年が今の係官だったのだ。わしが昔働いてゐたところのオヤヂの息子だったんだよ。あすこには大きな牛がゐたからね。全く試験なんかでよかったです。私は何だか晴々となったやうな氣がした。私は警察の高いステップを全く軽い氣持で下りて行つた。

富士本 (28)

(1) 私の缺点是早合点する事です。次女が生れて間

もない或日、私は妻と共に友人の店へ行つて話をしてゐた時、妻は友人の妻君から何か大きな包物を受取るのを一寸見たのです。之を見た私は例の早合点から、「ミセスさうおふ事をして貰つてはすみませんね。再三の事ですから斯ふ言ふ事はして貰はない方がいゝんです。有難うありました。」とやつたものです。之を聞いた妻は顔を眞赤にして、「これは私が他の人への贈物に買ったのです。」と小さい聲で私に言つたのです。この時私は欠が在つたら這入りたい程恥かしかったです。

(2) 魚釣に出掛け叢林に入り道なき道を搦へて漸く目的地の上方へ出た時です。

(3) 晝、登山、魚釣、山より遙か雲の彼方を眺め黙想する事が樂しみの一つですが、一番嬉しかったのが、今春コロラド河にて十九吋のバスを釣り上げた時です。丁度懸賞募集中でしたから一等には成らずとも二等には成ると思ひ天狗でしたが、悠悠と他の人々が太い奴を釣り上げたので、等外となつてがっかりしました。

西井嘉一郎 (3)

(1) 私が現役入營中のこと

である。兵營の向側に廿歳位の福井女學生が住んでゐて、毎日曜日には私達の下宿へ遊びに来た。或日曜日、私は友人和田と彼女の三人連れで藤島神社へ参詣し、その歸途壽司屋で晝飯を食べ、私と友人とはお燭一本で上機嫌となつた。さて出やうとする、その亭主をはじめ御神さんから下女料理人に至る迄、出口西側に整列して一齊に「有難うございました。御機嫌よう。」と聲をかけて見送つてくれた。娘は顔を眞赤にそめてゐたが、私は恰も聯隊長然たる態度で店を出たのであつた。

そして四五町も歩いたと思ふ頃、突然娘が、「私、單人さん大好きよ。」と言つた。「では僕と結婚しませう。」と返事をする、と、「今はできませんが、貴方は来年曹長になると和田さんからききましたが、寺田さんのやうになられたら、結婚しませう。そして、私寺田さんの奥様のやうに愛してあげます。」と娘は至極眞面目である。「寺田大尉のやうになつたら！」その時位、私は自分の地位を恥かしく思つたことはない。

### 吉崎妙子(31)

(1) 昔、私がまだ女學校在

學中の或る日、旅行日の發表がありました。以前のからの私の楽しみは、在米の母から頂いた外套を着て旅行をする事でした。それは紺色無地の折衿で上品なもので、其頃の流行の洋服に丁度よい位の丈で申し分なしでした。私は早速に着て旅行に立ちましたらお友達は羨ましげに「マア素的ね」とか、「これ舶來ですって」とか、「やはりハイカラね」とか、物見高い皆さんから本氣に羨しがられて旅行から得意顔で歸つて來ました。其の外套を着て愉快な旅行が出来た事を通信しましたら、其の返

事に、「多美江、あれはコートではないよ。お前が初めて宿り掛け旅行をすると云ふので、宿の風呂上りにはと思ひ、學生のお前に華美でない、上品な室内着を送った。」とあつたので、私の心は急に恥かしさで一杯でした。でもお友達にも先生にも宿の女中にも氣づかれず、立派なコートで通つて来たのですもの、と心の中で打ち消しても打ち消しても消えない恥かしい思ひの一つでした。

### 津村汀村(46)

(1) 渡米當時サンノゼ市より農村へ歸る途中二頭立

のワゴンに御して行く未知の白人から親切相に乗れと勧められ、乗つて心持好く感じて居ると、何か頻りに話をする。沈黙して居てはいけないと思ひ、私は時々エスと言つて相手をした。處が話は益々續けられる。私も負けずにエス／＼を連發した。さて、其白人の所に日本人の書生さんが四五名居るので、其夜遊びに行つたらボース格の書生が、「今日ボースが或日本人ボーイを途中で乗車させて歸る途中話をしたが、何を話してもエス／＼許り返答した。」と言つた。それを聞いた私は夫は自

分であつたが、まさか自分であるとは言へず、實に恥かしい思をしました。(3) グリースウード杖操り山野跋涉、副收穫、新鮮なる空氣に深呼吸、快感覺、伸々とする感じ、目的のピカ一品の杖を揮きんとする好奇心、仙氣氣分、其收穫の天狗話は？私共男子三名同道で山野を闊歩するので、天狗も退散、流星光底天狗は逃したわけです。

### 正木良支(22)

一九〇五年であるから私の壯年時代、元氣旺盛の頃である。勞働者募集のため私は大陸より帝陸に

派遣された。その當時、米國の大會社は競つて勞働者募集を行つたので、私も他の會社から遣られた四人を相手に大いに奮闘したわけである。

或日、ホノルル目拔のホテル街の日本人經營帽子店で、四五の人を相手に私は氣焰を擧げてゐた。勿論、店には客が出入りして買物をしてゐたし、その中に一人のカナカ娘も混つてゐた。話題は私が日清戦争の海戦で目撃した敵艦「甲丙」の沈没の有様で、大聲で「コウヘイ／＼」とゼスチューア宜しく辯じたてた。さて會話後店頭に出ると、先程

買物をしてゐたカナカ娘さんと、これもカナカのお巡さん三人が私を待ち構へてゐて、厭應なしに連行され牢に留置された。時の總領事齊藤幹氏（イキ）の御盡力で、二日後放免になつたが、此の時許りは私も驚いた。何の理由で捕へられたのかさつぱり分らなかつた。後で聞く所によると問題は軍艦「甲丙」にあつた。コヘイはハワイ語で女性の陰部の事を言ふのださうで、あのカナカ娘が一途に自分が侮辱されたのだと思ひ込んだものらしい。

ヒラ  
三谷眞種

(1) 今思ひ出しても思はず顔の赤くなる経験は私が青山學院英文科に在學中の事であつた。明治學院と共同主催の學生大講演會が開かれた事がある。

開會が宣せられ、司會者が開會の辭を述べてゐる。私は辯士の一人として正面わきの席に控へてゐたが、私の右隣には當時の院長石坂正治氏が居られた。私は先生が何か言はれたので、何氣なく「さうですね、そんなものでせう。」と答へた。とたんに先生の言はれた事がはつきりした。

「今夜は君達學生諸君の舞臺だから 僕の挨拶

なぞほんの形式で、フア  
刺身のつまのやうなもの  
だよ。

ハツと思つたがもう遅  
い。

今でも不注意な返事を  
しかけるたびにあの時の  
事を思ひ出して自戒して  
居ます。

ツルレト  
瀧川巴水

(1) 義兄急死の飛電を手に、  
甥同伴羅府より遠くシャ  
トルへの瀧車旅行のもど  
かしさ。その死因につき  
又悲歎に泣く姉を思ひ頭  
は正に混乱状態。やがて  
ポートランドに着驛、暫  
らくを下車し再び車中の  
人となつた迄は無事だっ

た。程なく發車後便所で  
用を済まし、涼しい顔で  
元の席に錨を下すや、背  
後から一白人がつゝくの  
でふと振り返る途端、彼  
曰く汝は婦人の方へ這入  
つたと注意され、大象の  
前恥しさに赤面早々次の  
カーへ逃げるが如く退却  
ホツとして冷汗を拭きつ  
つ考へた。ホ市で客車の  
向が變つたのに氣が付い  
たが後のお祭り……出  
の眼で歩いた大失敗談依  
つて如件。

(2) 眼に見えぬ物を掴んで  
聖く生き。

更生と共に人と神の前  
に洗禮の吉日を迎え全身  
水に浸つて最も嚴肅な式

を感激の裡に済まし一室  
にて着物を着用の瞬間、  
静かに聖堂からもれ来る  
讚美歌一ハ。番が松籟の  
如く又天来の聖聲か、全  
く我もなく世もなく恰も  
羽化登仙の心地で終生忘  
れ難き歡喜の絶頂でした。  
(3) 趣味として釣魚、碁將  
棋、川柳、そのうち最も  
大なるは川柳なり。

選の結果から見ても波動  
の如く一上一下幾度か全  
没の憂目に失望せず待て  
ば海路の日和と熱で當所  
句會第九十九回發表互選  
「卑怯」で最高点と二句  
入選更に席題の一席「元  
氣」で天位一客、二席  
「底」で地人と二客、三席

「晴天」で天位一客以上の成績を褒めて呉れた柳友に答へてナニと全くまぐれでしたと謙遜のかけに別な氣持もあつて鼻に異状を呈し天狗連の末席を汚した自分を叱る。

### 井上政次(14)

(1) 沿岸立退の日も迫つた一九四二年三月の或日、急に私は七十五哩離れた遠方の親友に會ひたくなつた。だが、禁足令！がある。五哩以外の地には出られない。「併し、この儘別れたらもう再び逢へないかも知れない。」たまらなくなつた私は「危いから断念せよ」と勧告し

てくれた友に「なあに大丈夫！」とひどい凸凹の裏道を古自動車走らせたのであつた。漸くにして親友の家が見えて来た。「もうしめたものだ！」と私は秘かに快哉を叫んだ。その瞬間、私の眼前に恐いものが現れた。「止れ！」私はガンと頭をどやしつけられた。「どうか……」私の家訴歎願も冷たい法律の耳には聴えない。「断じてならぬ。拘引犬は許してやるから、直ぐ元来た道を還れ」の嚴命！「なあに大丈夫！」と友の勧告を斥けてきた手前、私は次に陥ちてゆく様な氣持で秋家へ入つ

て行つたのであつた。

(2) 或日、樂屋へ行くと寢轉んでゐた大日師匠がガバと跳起き「井上！アメリカーの師匠が来てくれるよ。」と双手を挙げ、飛び上つて喜ぶので、私は「馬鹿！寢ぼけるな」と怒鳴ると「ノー！本當だ、しかもエーの國の人だよ。」と真面目である。「俺の國の者に優れた藝術家はないよ。」と睨みつけると、「ある／＼、勘須磨師匠だ！」

稍々沈滞の氣分ある演藝界の打開策を考へてゐた矢先にこの福音！師匠がきてくれると判つた時程嬉しかつたことはな

い。

(3) 旅行、登山、觀劇、相撲等。

### 喜舎場朝弼(42)

(1) 春風秋雨五十年願れば  
そこにはほんとに穴にも  
入りたいやうな恥しい失  
敗の思ひ出もあるでせう。  
又踊り上るやうな嬉しか  
つた事もあるでせうが、  
生れ付きのハニカミ屋と  
心臓の弱さはそれらを御  
披露する程の勇氣の持ち  
合せのないのを悲しみま  
す。

(3) 趣味は？ と聞かれて  
も元來がセツカチの質で  
すから落ち付きの要る道  
樂は作れません。

雨の日も風の日もと申  
してもよい位来る日も来  
る日も釣のセツ道具ぶら  
下げて、大河端に永々と  
水面とニラ目ツくらをし  
にテクツて行く人々を不  
思議想に見送つて居る私  
です。考へて打てば碁も  
五級位はと已惚れてゐま  
すが、下手な考へ休むに  
似たりと許り相手にも考  
へさせず、パチリ／＼  
十分間位で打ち上げてし  
まふやうな者です。呵々。

### 進藤舟水(2)

(2) 今は故人である藝術寫  
真、世界の大家ケールス  
氏と寫眞の事から心易く  
なり、それが動機となつ

て遂に寫眞を習ひ各國の  
寫眞へも出品する様にな  
つた。丁度それから二三  
年目の事であつた。例の  
如くロンドン國際寫眞へ  
六枚出品した。(六枚が最  
大限)世界中から集まる  
何千の印画に加つて最高  
權威の寫眞へ入選する事  
は實に六ヶ敷い。出品し  
て一ヶ月目の或る晩六枚  
の印画が全部入選した夢  
を見た。別に心にもどめ  
なかつたが間もなくカタ  
ログが届いた。見ると六  
枚入選してゐるではない  
か……本當に夢ではな  
いかしらと……その時  
のうれしかつたこと。

吉里竜耳

(2) 入所した年の十月末頃だった。第三キャンプの上の山には化石があると噂に、朝の三時頃歩行で採りに出かけた。當時は未だハイウエイではなく、凹凸道で、今の養豚場あたり逆行った時、一群のカヨテと出會して屹驚御天！「まゝ、よ勝手にしやがれ」と道の真中にどつかと坐つてしまつた。へ腰を抜かしたんではないですぞ」ところがカヨテ連中何と思つたか。道を外れて啼き乍ら西側の藪へ消へてしまつて下弦の月が其の上を淡く照ら

してゐるばかり。其の時までカヨテの性質をよく知らず、恐ろしい獍猛な奴とばかり思ひ込んでゐたので、やれ／＼命拾ひをした。化石所ぢやない引返さうと思つてゐる所へヘッドライト眩しく自動車が出来て停車したので譯を話したら丁度幸ひ其の人達も化石採りに行くとのことだつたので、便乗させて貰つた。今、自宅の前に飾つてある百斤近い太かい化石が其の時の記念品である。今から思へば何でもないがカヨテに退散された時は本統に嬉しかった。

(3) 俳句。

恒吉盛花(37)

(1) 未だ故郷に居た時、かねて想ひを掛けて居た女の所に……時鉄砲ならぬ木枕で！眉間をイヤと言ふ程一撃されました、今でも眉間に疵跡が鮮かに残つて居ります。それを見る度に恥かしい思ひが致します。

(3) ひる寝と馬鹿話。

高橋愛次郎

(1) 今は昔、さる宴會で澤山の外交官が綺羅星の如く居並んだ時の事である。其時に限つてどうした事か「オナラ」が出たくて我慢すればする程お腹が

グウ／＼言つては方がない。たう／＼一發やつてしまつた。所が續いて出る出る。居ても立つても堪らず眞赤になつて逃げ出した事がある。本當に思ひ出しても恥かしい失敗談。

(2) 或る時の事である。自分は財布を忘れて寒い雪の中を自宅へ歸らねばならない。タキシ代は僅か卅五仙だった。ひよつと下を見ると五十仙銀貨が落ちてゐるではないか。これは天の賜と、其の時の嬉しかったこと。

(3) 私は運動が好きで殊に水泳と来たら三度の食事よりもまだ好きだった。

ニ哩の水泳競争(日本)に命がけで泳いだ効あつて一等の榮冠を獲得、親から褒められた時こそ本當に天狗になつた。

アインシュタイン事  
玉岡貫一(4)

(2) 「アメリカには金のなる木が野山到處に生へてゐるさうだ。行つてその黄金をトランク一杯詰込んで歸らう。」と、青年立志出御関、海外雄飛の大望を抱いて、故國を出たのが私が十七歳の時であつた。爾來四十五年、その間リヴィングストンで二百五十英加の西瓜を植付けて大儲けした事もある。それに味をしめた私は今

度はコルサで米作に年を出したが、大失敗を喫して一萬五千坪の大穴をあけてゐつた。だが、「アメリカだ。金儲けのチヤンスは何處へ行つても轉んでゐる。」と樂觀して、諸所を轉々したが、最後にネバタの銀鑛入をして三ヶ年の辛抱を續け、つえだけあれば村一番の美人といふ折紙附の許嫁とスウパーホームが持てる。善は急げ！」と歡喜と期待とに胸をワク／＼させて出桑した處「おい、馬鹿票を買へ」と悪友が瀕りに透惠するので、「ようし、ぢや、すまないが、可愛い新妻と日本全國をハネ

ムーンするその費用を頂戴しやうか。」とボンと手の切れる様な五円紙幣を投出した。其午後、悪友が血相変へて走つて来たので、「どうしたか」と訊くと、「どうもかうもあるか、ユーはハッ當った。

五千円の大金が轉げ込んて来たぞ！」と我事の様  
に喜ぶ。その五千円を新聞紙に包んでホテルへ歸つてくる時は、まるで凱旋將軍の様で、足が地につかなくなつた。其夜、散髪屋さんに髪を剃つて貰ひ、五円のチップを出して、自分の喜びを頷つたのでした。

思ひ出してもその時は

じ六十二年の私の生涯中  
嬉しかつた事はない。そ

れは今から四十年前。

(1)私が廿五歳の時、メリ  
スビルで西洋風呂へ着換  
入のスーツケースを持つ  
て行つた。處がそれが町  
の話題となり、日本新聞  
に這書き立てられた時程  
恥かしい思ひをしたこと  
はない。

(3)趣味は旅行、温泉入湯  
そして一杯機嫌で安来節  
とホレ／＼節を唄ふこと。  
天狗談？ 安来節やホレ  
ホレを唄つて、喝采を受  
ける者、ポストーンでは僕  
の右に出づる者はないだ  
らう！ ヱヘン！。

ツール・レキ

山田如骨

(1)ヒエウ、と竹刀が鳴つ  
て左横面、ゲワンと耳が  
鳴つた。アツと思ふ間も  
なく今度は返す竹刀で鋭  
い右横面、目から火花が  
散つた様であつた。「一本  
と審判官の聲。思ひがけ  
なき横面を喰つて頭はボ  
ウとなり竹刀は亂れた。  
その虚に附け込んで敵は  
易々又一本取つて、「勝負  
アリ」實に呆氣ない惨々  
な敗け方であつた。

それは憶ひ出しても夢  
の様な二十餘年前の昔、  
羅府日會主催の園遊會に  
於ける剣道試合の時のこ  
とである。勤めらるゝま

まに出場すれば顔が會ふ  
たは某學園の擊劍の先生  
M氏であつた。

これより一週間前、地  
方の試合で土地の自稱劍  
道家退役陸軍少佐殿と、  
今日の當の相手M氏とを  
美事負かして間もないこ  
となれば、又かと戦はん  
前既に勝つた様に意氣軒  
昂、驕つた氣持であつた。  
それが斯うも悲惨な敗北  
である。觀衆には只の勝  
負の様に見えたらうが、  
自分にはたかぶつた自負  
心を手ひびく叩きのめさ  
れた惨めさであつた。席  
に度つて面を脱げば觀衆  
の瞳が皆自分に注がれて  
る様な恥しさであつた。

西田花子(59)

(3) 私がグランマースクー  
ル七年生の時愛國行進曲  
のレコードを聞いて、日  
本の歌が大へん好きにな  
りました。

其の頃は流行歌のレコ  
ードなど一枚も持つてゐ  
ませんでしたが、其の後  
毎年いろ／＼なレコード  
を取りよせ、歌ひ樂しん  
でゐる中にそれが私の唯  
一の趣味となりました。

昨年P.T.A主催で各學  
校教師招待會の際第四舞  
臺に於て数千人の聴集の  
前に立ち「ホーリチンサ  
イライ」を歌ひ、熱狂的  
拍手喝采を受けた時は悪

い氣持はいたしませんで  
した。

岡本 稔(1)

(1) ありますねえ。確に、  
恥晒らしたが昨年の正月  
も半ば頃、氣にしてゐた  
隣キヤンプの友人を訪ね  
て久方振りの杯で意氣衝  
天、時を忘れての快談に  
大いに命の洗濯をした。  
奥さんの心遣ひで余り深  
更に入らない内におと、  
なちに丈文丈ですよ。と  
意氣揚々同家を元氣よく  
退去したことだけは覚え  
てゐる。ハオウエーを土  
産の袋包を片手に大道尚  
狭し。エーチャチャラチ  
ヤチャン／＼で、折し

も通り掛つた白人婆さんの車は幸ひにも、まあこんな處を夜中に獨りで、と言つたかどうかは知らないが、兎も角数分後には車内のクツションに高敷きの件の男を警察に届けて呉れた。ポリスのお情けで無事？ 帰宅出来たことは無論だが、翌朝妻に吐いた失言はかうでした。「どうだ俺あねえ、何處でどれだけやつたって宅にだけはちやあんと歩いてバも歸らないと氣の消まない性分だね」と。妻は未だ酔つてゐるのね、と言つた顔付で睨みつけて居ましたことでした。

### 泉田準城(2)

(1) いのち長ければ恥多しとやう、七十餘年の回顧は殆んど失敗史。恥かしい事だらけであるが、就中最大の一つを挙ぐるならば、

約二十餘年の昔、「三佛教會合同」と言ふ運動がロスアンゼルスに突發した。其頃「中央」「南加」「羅府」と三個の支々獨立した同一派の佛教會があつたのを、合同せんとする事件であつた。然るに中途にして三佛教會共不賛成を申出た。當事者は是非断行せんとして法廷に持出し、三佛教會

中の一、「羅府佛教會」を被告として論争、原告の敗訴となつて落着はしたものの、三佛教會は新設のものを加へたので四佛教會となり、同胞間の不和は一増し、信徒の迷惑は重り、局外からはツマラナイ喧嘩と冷評され、佛敎其者にまで悪影響を蒙る等、は責任者の一人として之を思ふ毎に恥かしいこと、穴に入りたい心地。

(3) 庭園の草樹イザリ殊にプルニング。讀書。旅行。天狗談なし。

西野信太郎(3)

(1) 或年歸郷の途横濱にて

下船早々在京舊藩主家新  
築落成御披露の園遊會に  
招かれ、旅装のまゝ簡單  
に末席を汚す。圖らずも  
數多同席来賓の盛装に觸  
れ吾れ生きし心地なく、  
穴あらば入りたやの感極  
む。實に恥かしくもあり  
又失敗此の上もあり。  
(2) 吾が初子安産母共に健  
在の吉報に接せし時、會  
て無き喜に満つ。  
(3) 趣味は美術なり。親友  
の一人に畫家あり。それ  
が佳作を談ずるの時吾れ  
知らず興じて自ら天狗其  
のものである。

伊藤四郎(14)

(1) 一九二六年、私は日本

よりの訪客を連れ、コロ  
ンビヤ南岸、フードリバ  
ー、ポートランド間を案  
内した。私は絶景の名稱  
四季、朝夕の風趣等を我  
が物顔に説明した。然る  
にホ港で晚餐の際、訪客  
と共に衆人列席の中で、  
私がミツヘルポイントと、  
ゴードコロンビヤをはき  
違へて居た事が判り、私  
は赤面して恥ぢ入った。  
冷汗未だ乾かない氣がす  
る。それにしても文藝人  
は、恥しい失敗談。むご  
い御尋ねをかけらるゝ。  
(2) 少年時代九州の片田舎  
から、あこがれの東京へ  
と行く途中、神戸驛で切  
符も小遣も失くして途方

(手)  
にくれ、驛のベンチへ腰  
かけて居った。誰かしら  
私の事情を尋ね、東京迄  
の切符と小遣二十圓を私  
に與へた人があつた。私  
は實際飛び上つて喜んだ。  
手の舞ひ足の踏む處を知  
らず、折りから停車中の  
東京上り列車に、改札口  
を走り抜けて飛び乗った。  
そも／＼其の紳士、何處  
の誰だらう？後で新聞社  
「神戸又新」にて尋ねた  
が遂に判らない。私はあ  
の時代の稚氣が恋しくて  
ならない。  
(3) 雨夜の讀書。恥かし乍  
ら天狗談はないです。

石井千鳥(5)

(1) 元來各氣者の私には今までの生涯に失敗談は数教ありますが、今思ひ出して汗の出る様な事。

或る歡迎會の司會者を仰せ付かった事がありますが、おはて者の私は上着を裏返しに着て平氣で居りました、後で友人に注意されて赤面どころか青面致しました。

(2) 在米中一番嬉しかった事は先年日本から練習艦隊の参りました時、昔の教へ子が中佐となつて乗り組んで居りまして、二十年振りで先生と言つて私の手を握つてくれましたので、思はず嬉し涙にくれました。

(3) 趣味としては讀書、人形集め。

### 安本時子(3)

(1) 或る白夫人の家に手傳ひに行つた時の事、オーマテイックスストーブの使用法が解らないで、一定の時間が経て自然に熱くなつたのを喫驚してスイツケをとめて終ひ、外出先から歸宅した婦人に大笑ひされた事がありません。今思ひ出して田舎者だらうなと吹き出し度くなります。

(2) 日米開戦後間もなく主人が引され、小さな子供と老母を連れてどうして此の苦境を切りぬけ様

かと苦しんでゐた時、それまでは餘り懇意でもなかつた或る人に非常に力づけられ勵まされて親身も反ばぬお世話を受けました。あの時の事は嬉しかつたと言ふよりも、むしろ感謝と感激に満ちた永久に忘れる事の出来ない想ひ出と言つた方がいゝかも知れません。其の後其の方も拘引されて今はクリスタルに家族と同居されて居ますが、私は毎日〇〇さん有難うございましてと心の中に合掌して居ます。

(3) 讀書。手藝。旅行。天狗談なし。

河部健次(26)

- (1) 入所當時間もなく見れば碓に畑であるのに、草が青々と出揃つて居る。ローンの草も斯くして作るかと思ひの外、是はスピニチの初芽ですよと大いに笑はれたのには一寸赤面。
- (2) 世の中の事情を委しく知る事が出来た時は何より嬉しかった。
- (3) 謡曲です。

兎王なま(26)

(1) 話はだいが前のことで始めて渡米する船中であつた事です。或日船員が氣を利かせて膳部を寢室

に運んで来てくれたのを、大変喜んで隣席のミセスと共にいつにない脚馳走ですなと言ひながら箸を運ばせてゐた所が、何とそれは同室の他の二人のミセスの主人が特に注文して四人で會食する為のものであつたのです。食事半ばにそれと知つた時のまあ氣まりの悪かつたこと!!。

(2) 結婚後八年目に始めて子供を儲けた時。

(3) 短歌。收容所入りをして間もなく左の拙詠をさる先輩にお目にかけました。

煙突の煤をとりきて  
墨に代へ字は書きに  
けり假りの住ひを。

(廿三)  
ところが間もなく或日のこと、今では一寸手に入れ難いこと程左様に立派な硯道具一式揃へた小包が届いたので、この贈物は私共をして有虞天にさせてくれました。

國分五郎(59)

(1) 話は今から四十年前も前に溯ります。私等青年時代に宣教師に招かれて西洋料理の脚馳走に預るのが大なる樂しみの一つでありました。

或日午餐に招待されました。卓上には眼と舌とを喜ばせる珍味が列べられてありました。食事中四方山の話をなし、談偈

偶東京に在る一婦人宣教師の噂に及んだのです。

「ハア、私存じて居ります。あの口の大きな御方でせう？」と私の舌が無意識に滑ったのです。すると主婦の御顔は見る見る金時の様に赤く、今にも泣き出しさうになりました。主人は「戲言だよ、さう怒らんでもよいだらう」など其場を繕ひましたが、「イエ、それは餘りに不深刻です！」一座暫時沈黙。

私は其の時の事を思ひ出すと今でも顔がホカホカするのを覚えます

### 新野庄作(39)

(1) 私の様な性急ソツカシヤな者には失敗談や恥しい話は筈ではいて捨てる程あります。其最なるものは、今より

卅年程以前に、南加ゲレ

ンデールの満員電車の中

で花恥しき美人の横顔に

唾はきかけた時の事です。

無論過失ですが余程教養

のある婦人と見えて、何

事も言はず静に自分のハ

ンカチで顔を拭いて居り

ました。其の時の事今思

ひ出しても冷汗が出ます。

(2) 在米放浪十六年の身を

杜用を帶て渡米し来れる

兄によりて連れ還られて

横濱港へ入航の朝三時頃

電燈の光暖々たるを見た

時の嬉しかった事今でも

忘れません。

(3) 昔は兎に角今日此頃は讀書に余念なしと言ふところでは

### 大塚今朝之進(39)

(2X1) 夜學の戻り道、誰に誘

はるゝともなく更科とあ

る縄暖簾に潜り込み、大

威張りで注文の盛を平ら

げる迄は無事でありたが

「お幾何？」と問ひに應

じて「七錢頂きます」と

言はれ、早速袂に手を差

し込む途端、ヤレ失策た

と氣が付いたが後の祭り、

實は金を忘れて来たので

ある。全く極り悪さに穴

でもあつたら這入りたい

氣持、何しろ緋の浴衣に

兵児帶一つの粉装、いくら探す素振りをしてても金の出て来る筈はない。「誠に面目ないが金を忘れて来たから明晩お拂ひ致します。何卒悪しからず。」と途中で落したとも誤魔化しかね正直に白状した。連が亭主は神田水道の水で産湯を使ふた江戸子、齒切れのよい口調で、「へい宜しふ御座居ます。」不烟と思ふてか將たポツと出の田舎者、喰ひ道げする度胸のない奴と見極めたのか。潔い返事に私は甦った様に蕎麥屋を飛び出した。其の年月は忘れたが夕刻東京市麿の門前に差し懸るや「屋亭が殺

された。」と大勢の人々が喚きながら轉び出たのを記憶する。

### 永瀬正臣(18)

- (1) 恥かしい失敗談はあるけれど、いふに言はれず書くにかゝれず。
  - (2) 鈍感な人と生れてこれといふ 嬉しさ書けず頭かくのみ。
  - (3) 下手ながら作る趣味なう和歌俳句、川柳と詩に印をほること。
- 読む趣味は詩歌の類に人として 修め踏むべき修養の書。
- 見る趣味は書畫骨董に風景と 武道の技のいろいろのもの。

### 岡本實(30)

- (1) 田舎出の一青年に過ぎなかつた私は船室の都合上渡米に際し一等船客として乗船し、食事の方法も知らずに堂々と食堂に飛込んで凡ゆる無作法を演じたこと。
- (2) 何回かの流産の後に妻が無事に女兒を生んだ時
- (3) 趣味は碁です。ポストンに参りまして自分の手を取つて教えた青少年が幾多の先輩を飛越えて將に師の私を凌駕するに至らんとしてゐることである。

### 貴家未ま子(2)

(1) 思ひ出しても恥かしくなるやうな失敗談を書きますと、今度は大勢の面前で二重三重、或は何百回かの恥かしさを晒し出す事になりますので、それを公表する勇氣に缺けてをります。

(2) ポストン文藝協會の創立です。

(3) 私の趣味は、どれもこれも、まだ天狗の鼻の高さにまで到着しませんが、何れ到着の暁には大段的に發表したいと、楽しみに待つてゐる次第であります。

### 大西量平(32)

(1) 妻を日本へ歸らして從

兄弟は町の老判事の隣へ引越した。住む家も生垣までが同じ築りで一寸見分が付かぬた。其當時私は土曜毎に町に出て同家に泊るのが定りであつた。霧の降る夜更に常もの様に歸つて行つた。土曜にかざりキーをかけない事になつてゐる戸が開かない。起して見るが答がない。暫時途方に暮れた。パララーの窓が少しく開いてゐるのに氣がつきそこから飛び込む事にした。容易に這入ることができたものゝ、あるべき所にプラントがない。手障りも違ふ様だ。変だと思つて次のルームに近ぐいた

時、「どなた」と優しい女性の聲がするではないか。女氣はない筈だ。女房不在の不自由さに：てな事を思ふて見ただけでは私にはまだ餘融があつた。暗に白衣の女神が浮んだ。其刹那、太い木刀で腦天をしたゝか打たれた様なシヨツクを受けた。私は老判事の宅に押し入つてゐたのだ。咄嗟の言わけもそこへ、「速く出て行きなさい」を聳ひ飛び出した。不安の夜は明けて早々お詫びに行つた。朝の新聞紙を手にして「ハイスクールボーイで甥のヘンリーとばかり思つた。」と私には無暗着け

にカラ／＼笑つてゐる三十四五の婦人。判事婦人の連子で船乗りの亭主を持つ人で、全てがよく整つた話に落ち着のある女だといつ／＼感心させられた。

其後二三年して紹介された或る人から「君があの夜の押入り強盗でしたか」との挨拶にて穴でもあれば這入りたかつた。

### 大江萬藏③

(1) 余りに考へことをしながら歩き便所に行つたのでしたが、思はず知らず女の便所へ入り込んだ事。(2) 立退き前に親類の家のベスメントに残して来た

ブックが三百冊 W R A の手を通じて取り寄せる事が出来たこと。

(3) 議論をすること、著を打つこと、讀書すること。

### 永井伊太郎②

(1) 何の因果か生来の毒舌を弄して人を嫌がらせて快とし、後で其人の顔さ元見れば恥かしい思ひだらけです。

約廿ヶ年前、私がいつもお邪魔する羅府エー會社に小柄なスマートな薄記係が居りましたが、例の悪癖で其の人を栗鼠と陰で呼んで居りました。或る日友人 S を訪れた時友人が其の人の話をした

のを皆追問かぬ内に「アーあの栗鼠か」と言ひも終らぬ内に、其所に居つた乳兒を連れた若い婦人が「ハイ、私がその栗鼠の家内とこれが小供です。ドウカ宜しく。」と挨拶をされた時は、如何に厚顔しい砥石の方がスリヘル様な私も、小さな穴でもあればの思ひでした。時折の思ひ出にも顔に火の恥しさです。(2) あるべからざる所で酒を肴に見付けた時の嬉しさ蓋し同好の人のみ共鳴する喜びでせう。(3) 謡曲です。天狗は藝の行き詰り、烏天狗<sup>カラス</sup>伍の處で沙免を蒙ります。

永瀬勇(18)

(1) ポストン文藝協會の第一回歌會に出席した時、皆から煽てられて其の日の詠草集に對し歌評を試み、無茶苦茶な批評を臆面もなくやつた事、今顧て冷汗一斗の感あり。穴でもあれば這入り度い思ひである。勿論此の失敗は今日も尚ほ仕續りてあり、毎月の歌會後、前述と同じ様な氣持を味つてゐる。

(2) 丁度短歌を詠む事を習ひ始めたる頃、故國の短歌雜誌に投稿した接詠が特選欄に数首發表された事、是が原因となつて未熟な

がら尚ほ今日も作歌を續けてゐる。

(3) 日本文學の精華とする短歌を研究し又其れを詠むことである。

山根貞藏(317)

(1) 青年時代に某縣の中學生が修學旅行に來た時、旅館の周旋を頼まれて案内したのはよかつたが、家弼を間違へて五十名許りの生徒と共に藝者屋の玄關に乗り込み、番頭とんに「こちらは旅館ではござらぬ。〇〇館と云ふ藝者屋でございます。」と断はられ這々の体で逃げ出した。今尚當時の事を思ひ出すと冷汗が出る思

ひがする。

(2) 誰一人頼る人もなく渡米した僕は桑港に上陸後二週間位経つてから、ふと未知の地王府に出掛けた。第七街をぶら／＼歩いて居るとみすゞと云ふ十仙飯屋を見付け中に這入つた處が、一年前に渡米した友達に出會ひ其の奇遇を喜んだ事がある。僕の一生を通じて嬉しかつた事の一つであらう。

(3) 野球と讀書。

北村利恵(3)

(1) 過去を振り返つてみるにこれはと思ふやうな大失敗談はありませんけれど思ひ出しても恥かしくな

るやうな失敗ばかり多くて、今更らながら自分自身の愚かさに此頃つくづくあきれてゐます。

(2) 夢の多い少女時代はとにかく、結婚も年格別取りたてゐるやうな嬉しかつた記憶もないやうです。

(3) 手藝、文藝、音楽、生花等に趣味は持つてゐるとは云ひながら、いづれも天狗の爪の垢程にも達しない貧弱さで、洵に恥かしいと思つてゐます。

マシナ  
山内狂月

(1) 一九〇七年秋渡米三ヶ月日にアラメタ市のボーディングに皿洗として住込みました、コックの女

が毎食後私の仕事する所に塵を掃きかけるので手真似で制しても止めない。英語は出来ず、癪には障る。恰度四日目の晝掃いてゐる筈を引たくつて思ふ存分殴り倒し、大聲で泣くのを後へに昂然と室に歸つたものゝ、臨月近い腹であつた事を思出すと後が面倒、立去るに限るとスーツケースを引提て停留所へ駈付たが、生憎發車後で一層の事徒歩せうと鉄橋へ差掛つた所、制服の男が呼掛けてゐる。てつきり巡査と勘違ひして一目散に駈出し中途で行つた時、俄に橋が横轉したので屹驚仰天立竦ん

で居た折も折、足許でべルが鳴りだしたのに又驚いたが荷物を目覺し時計と知れて安心。其内橋も元通りになつたので歩き出すと向側の制服男が何か言ふけれど一向通じず只オーライ／＼でサッサと逃げ歸つてよく／＼考へると、橋が廻るから待てと言ふたのを追跡と思込んだ失敗だつた、今でも思出す度に大笑ひしてゐます。

(2) ナシ。

(3) 川柳、和歌、手工。

ツクリレキ  
牧さやう

(1) これは女學生時代、田舎を丸出しで東京方面へ

# 修學旅行をした時の事

六月の〇日東京へついて二日泊りといふ事になり自由行動が許されて三々五々と宿を出て行き、私達五人組も上野公園の方へ出かけました。公園の香ばしい青葉の下を、大學生會社員風のアベツクが幾組となく行くのを見せられた私達、「こんな處真早よ。ドライヴしよう。」と一致して道へ出ました。とそこへ一臺の圓タクがよつて来たのでした。F子さんハイカラな人で東京へついたその日から「馬鹿にされるとシヤクだから、東京辯真似てやるわ」と方言の下へ急に

ホ、ワとかくつつけて話すのです。ハは窓の處へ近づいて「名高い處を棄せて廻つてくれ。」といふ意味の言葉を吹き出した。位面笑しい東京辯でしきりに値切つてゐるのです。運ちゃんがうさんくささうに見廻すのでハラ／＼して私達はF子さんのスカートを引きました。随分不良女學生とでも思つた様な顔付きをして自動車はそのまゝ行きました。考へる今でも類のそまる思ひです。

ツリーキ

石川凡才

凡才！元來が鈍感な男でありまして、数々の失

敗談がある筈なのですが、昨今は何も彼も忘れてゐる新婚の二人。何ものかに酔拂つてゐる様な心境です。

週日上村夫人を尋ねた折です。石川さん嬉しい事が澤山あるでせう。ボストン新年辨に送りなさい。」と申されましたが、命の次である川柳さへも纏らないのであります。

加州の獨身者凡才、俄に二人の父となり、夫とひまでされて、少々照臭い氣分です。元來旦那學を研究してゐなかつた私には、一野人凡才が最も想應しいのであります

が、縁と申すのでありませう。四十二歳の今日迄孤軍奮闘した凡才城、一女性の爲に破れて、只今は愛の巢に籠城してゐる有様です。

何卒御皆々様御推察の程を。

○笑ふものには笑はして夫婦中。

## 板谷金市(4)

(1) 勝手氣儘な生活をして居る私には数々の失敗談があります、そのうちでも先方様を知らずに女の方や男の悪批評をした事が二度や三度ではありません。話なかばで、あつ！この人の妻君だ！い

や親類だと氣のついた時はもう遅いのです。心の内で、どういふエ合に切りぬけやうかと苦心をします。正眼流の私の構もたち／＼になつてゐます。轉住所内でも二度程かゝした失敗をやりました。

(2) お醫者様がもう駄目だといはれた子供が全快した時。

(3) 趣味ですわ。子供の人形や玩具を集めて楽しむこと。天狗談は子供相手に聲色をまねること。殊に動物や馬の鳴聲をまねて笑はれるよりは私一人がよい氣持になつてさあぐ時。

(1) 幸か不幸か青年時代より過不遇もなく普通の境遇に恵まれて居た爲に、特に申上る様な話の種も無文候。

(2) 多くの人は結婚當時であると思えますが、夫は青春時代の事と思はれます。吾々の様な晩年の結婚には特にお話する程の事ありません。矢張學生時代の事が一番嬉しかった様に思いますが、吾々學生時代には今日の如くスポーツ熱もなく、平凡に年月を送つてしましました。

(3) 特に取立てる程の趣味

としてはありませんが書道にしろ、演藝にしろ、藝術、ありとあらゆる観る聞く事に多少の趣味を持ち、讀物は歴史、探偵、武勇俠客物を好みます。天狗談と來ては色は赤くなし、鼻は高くなし、逆も天狗にはなれません。

### 塩谷潤二(11)

(1) 思ひ出しても恥かしくなる様な大失敗談はありませんが、小失敗は日々繰り返して居ます。恐らく未來もそれをくり返しつつ、余生を終るだらうと思つて居ます。昨日ありしことを今日思ひ出して見ると、一つとして恒

たらざるものがありません。それあるが爲今尚碌々として吳下の舊阿蒙なのです。

(2) 十幾年かの昔、惡地主に引つかゝつて貳年間辛苦して作り上げた作物を土地法を指に全部取り上げられ、精神的にも物質的にも全然行詰つたとき、平素余り深く交つて居なかつた友が温き手をさしのべて私をその窮地から救つてくれたのが一番嬉しかつたです。——  
人の心の奥ぞしらるゝし  
と言ふ歌さへある世にと、  
今尚その友の恩を感激しつつあります。

(3) 寫眞、讀書、園藝、魚。

釣と何でも御坐れなのですが、今は唯魚釣のみをやつて居ます。天狗談はありません。

### 新納嘉市(28)

(1) 願れば五十年に金んとする半世期の昔、赤面した古疵が計らずもポストン文藝新年舞の質問により魅つた。當時を追憶して今は苦笑と変る。其昔、中學入學難何ものぞ！と銳意勉勵、一番入學の榮冠をかち得た歡喜！だがそれも一朝にして吹き飛ばされて了つた。事の起りは入學と同時に規定に依り、前夜寄宿舎入りをした。翌朝々飯の合圖に

促されて数百名の學生と共に食堂に雪崩れ込みしまでは無難、儲て自分の席が薩張り不<sup>つ</sup>合<sup>う</sup>ない。教へてくれる親切者もなく進退谷<sup>キツ</sup>まりて一空席に飛び込んで教杯を平げ、怒々自室に戻りしが、後刻室長殿より「貴室新入生〇〇事今朝他ノ朝飯ヲ失敬シタル段不都合ナリ。自今注意アリタシ。」といふ舎監よりの一通を示されし時は全く赤面どころの騒ぎではない。最高級の慚愧將に形容の辞に苦しむ。盗食者の汚名を被たる純真其のものゝ心境御察しあらば幸甚吁々。

(2) 場所はデキサスの片田

舎、時は千九百十一年、南國の夏の真盛り、大旱に雲霓<sup>ゲイ</sup>の望み絶え、灌漑設備不足に苗木の枯死が園主に火の頭痛、慄急策の命令一<sup>下</sup>。ワゴンの箱をタンクに置き代へ、ミエールニ頭をドライヴ初回を終り、空<sup>ウツ</sup>タンクで小デツチを越した。ガタンと起つた音にミエー公驚いて狂奔、サテ一大事とラインを引き締る甲斐あらばこそ、空タンクはミエー公に拍車をかけて荒れ狂ふ計り。終に梅<sup>ウメ</sup>檀<sup>ダン</sup>の大木に衝突一大音響と共にタンクは地上に轉落、其瞬間小生はダブルツリの上に滑り落ちた。間一

髪連結本は真二つに斜に折れた。一刹那、槍の穂先宜しく鋭利其の物の切一枚の際どい處でミエー公松樹に変き當り停止した。キヤンプ中は新<sup>ニ</sup>死んだと上を下への大騒ぎ命拾した小生は茫然自失我に歸つてあゝ嬉しかつた。全く幸運だ早速二〇哩離れた町に行つてビヤ樽一つ持ち歸り一同と痛飲。謹賀新年以上の謹賀新年、目出度。目出度。

酒井知己(18)

(1) これは昨年私が教師をしてゐた時の出来事である。私が教場に入つて行

くと生徒は皆まじめに勉強してゐた。非常に愉快だった。凡談が言つて見たくなつた。そこで私は始めた。

「もし此の室の中で自分を馬鹿と思ふ者は立つてごらんなさい。」

長い沈黙の後、一人の新入生が立ち上つた。

「あなたは自分を馬鹿と思ふんですか？」

と私は聞いた。

「先生、別にさういふわけではありませんが、私は先生がさうして一人で立つていらつしやるのがお氣の毒と思ひますので。」

梅田元平(35)

(1) 若い頃から左の方を可成り盛に嗜みましたので、その方その他愛もない失策では敢て人後に落ちない程の教がありすが、教育資料にもなり兼ねる代物ですから、今度は免して貰つて又の折にでも話させて頂きます。

(2) 近頃の事では、久しく會はなかつた舊知に思ひがけもなく、センター内でヒョッコリ會つた時は嬉しい心持が致します。

UMEYA COMPANY

1946 LAWRENCE ST., DENVER, COLO.

謹賀新年

本年も倍旧  
と愛顧の程  
は願ひます

梅屋商店

煎餅菓子類

製造卸販賣

デンバー市  
ローレンス街一九四六

小説  
當選作

# 等一つの解決

ノ

干世



其の人が私の視野に現れたのは何時頃であつたか？

ポストン生活三年近くになるのに、灼け付く様に私の心に寫り始めたのは、ほんにつひ最近のことである。

その人とは、年齢四十四、五歳位だと思える、瘠形でスポーツマンタイプの男性である。勿論、年齢から見ても事實彼には美しい奥さんも可愛い、令嬢もある人でもあつた。

同じブラツクに住んで居るので、入所當時から朝晝晩と顔を合せる機会が多い。だが私に取つてその人は何でもなかつた。たゞ同じブラツクで共に住んでゐる多くの人の中の一人であるに過ぎない。だがその人が今はたゞ何でもない存在だけではなくなつて来た。私も又、子供の母であり妻でもあつた。そして私は、自分の夫と子供を世界中でと出つても決して過言ではない位、愛してゐる。だのにその人がどう云ふ縁でか、又何時からか、その私の心の片隅に喰ひ込んで来てゐたのである。と云ふと何だか人の事見たいで甚だ変な事であるが

れども、事實、夫と子供を愛して來てゐる自分の心の中に、そんな影がさして  
來た事をハッキリと認めざるを得なくなつたのは、誠に自分でも不思議の至り  
であつた。それが恋愛であるか何であるかはキツトはつきり私にも云ふ事が出  
來ない。何故なれば私の心はそれ以上に彼の爲めに占領される事もなかつたし、  
又進んで自分から此の事に突き入らうと云ふ氣持もなかつたからであるが、そ  
れでも一日々々とその人の姿が私の眼に寫り始めた。斯う云ふ事が一般に云は  
れる處の低級なる人妻の恋であり、中年者の熱い愛の始まりである、皆は云  
ふに違ひないだらうけれども、私としては決して、それこそ、西から太陽が昇  
る事があつたらと云いたい位、確かな氣持で其れを否定して見たい。だが私が  
その人を好いてゐることも又事實である。

或る春の朝!! ホストンの四月の太陽はチカ／＼と銀色の日射をお粗末なバ  
ラツクからバラツクへと投げ掛けてゐて、ストリートも草の葉も一樣に白銀色  
の半面を大空に向つて反射させてゐた。私は其の朝、非常に快よい眠りから覺  
めて輕やかな氣持でメスホールに入つて行つて、コンフレックスに冷たい眞白  
いミルクをかけてスプーンを軽く廻し乍ら、兔もすれば鼻唄でも飛び出しさう  
な朗かさで一口々と悠つくりと噛みしめ乍ら食べ始めた。

ウインドウ越しに眞青いきやスタアの葉が清新な朝を呼吸してゐるのが痛い  
位瞳に寫る。どんなに美しいお庭が其の向ふにあるのだらうかと云つた様な錯

覺を起させる。ブルーのカーテンを優しい風が弄遊んでゐる。食堂の中も明け放されたウインドウから明るい光りが一杯に流れ込んで、前のお嬢さんの顔も殊更に今朝は若々しく美しい。

その時、私は斜後から何だか人の視線をチカリと感じた様な妙な氣持を受けてクルリと顧みた。その人は私の横顔をジーツと眺めてゐたらしい視線と私の視線が一瞬、パツと打突かつた。大きな黒い瞳が、エラ／＼と揺れたと思ふと、その人はその儘靜かにブレードを口に持つて行つた。私は何故だか、ハツとして急に熱い血が顔に上るのを意識した。そして、瞳に入つた小さい震へが全身を走り去つた。それきり私は二度と後を振り返る事もなく、心の動搖を殊更にカムフラージして落着き拂つて食堂を出た。その日から私には食堂に於ける此の重大事件が屢々繰り返されて行つた。その人はやつぱり少しも變らずたゞ時々チラリ／＼と視線を送つて来る。勝氣な私にはそれに向つて微笑<sup>ホエ</sup>み返す様な事は出来なかつた。だが私の心は日を経つに従つて其の事に對する輕蔑も反感も起らず反つて親しい楽しい氣持を感じずる事が多かつた。私はそれだけで良いと思つた。たゞお互ひに親しい心の友達だと云ふ黙認だけで……そして、何だかこのポストンの貧弱な生活に一脈の力を得た様な明るさを感じるだけで、私には充分樂しかつた。或る時私はこの事に就いて、細々と考へに沈んで行く事があつた。全くどう云ふ事からか、又何時からか、ほんとうにハツキリ私には始まりを掴む事は何

度考へても出来ないものであったが、あの朝の瞳を背に感じた日よりもずっと前から何だか心にあった様な氣もするし、自分ではそれを意識してゐなかつたのであらう。だが兎に角、始めは始めとしても、今後この事は私達の上に、お互ひのスイートホーム（私には全く、私の今のホームは、斯う云ふ價值がある程何の不満もなかつた。）を破壊する恐ろしい力があるとは思へなかつた。その人の心も又、さうだと察せられる。

だが人間の世界に於て、人の妻たる者が例へ心の一部分にせよ、他の男性の姿を秘めてゐる事は罪惡であるのだらうか？、たつたそれだけでも、女性の姿でなく男性を心の友に持つと云ふ事は決して人妻のなすべき行爲ではないのであり、大に非難されるべき物であるのだらうか？。そして私には一つの光の様な物であつて、それ以上の何ものでもないたゞほんたうに懐しい心の友だと云ふに過ぎなくても……。夫を愛してゐる私は、愛と云ふものに就て考へる時、誠の愛と云ふものはたゞその夫のみを心から熱愛するだけが純愛であるとすれば、自分は夫をそれでは誠に愛してゐないのか知らと思つて見る時、優しい夫の姿の何處にも私は美しい氣持の愛を持つてゐる事を感じずるだけだ。それだのにやつぱりその人の影も心の片隅にキヤンと入り込んでゐるのである。私の夫に對する態度も心も昔と一寸も變つて行つては居ない。たゞ此のポストンに於ける毎日に、あんまり苦痛を感じなくなつた様な氣がする。

斯うした心を抱いた儘、夏から冬と時は移り変つて行つた。ポストンの冬は又、夏から一足飛びに訪ずれて、冷たい空氣を含んだ風が日増に強くなつて来ると、折角青々と繁つた草木をも、どうかすると一夜の中に淋しい冬の姿に変へて行く。私は自分の心が斯うした四圍の情景に依つて差配されるものではない事を信ずるけれども、この頃からその人の姿を秘めた心の影に、焦々しい煩らはしさを感じ始めてゐた。

突き進む事も出来ない。こんな氣持で何時迄も、過ごす事は例へて罪惡でないにしろ、もうソロ／＼一つの重荷の様な心持を抱かされる事が多かつた。

私はこの事からサツパリと離れて行かうと決心し始めてゐた。さうして又、さうする事に對して少しの未練も悲しさをも俱なはない事も知つてゐた。

そして私の心に現れた一つの光が自然に薄らいで行つてこの小さな思出は短かい餘韻を残して消えて了つた。その人はやつぱり同じブラツクに共に住んでゐる多くの人々の中の一人に過ぎなくなつた。

明日の晩は子供達の爲に楽しいパーティーがある。私は子供の小さな服を取り出して見て、純な心で可愛い、子供の服にキツスして見た。

遠い過去の中にも私は幾つかこんな思出がある事を思つた。そして今、私は世界中で一番幸福なる妻であつた。

(完)

新年賀状



此の新年賀状  
は、貴女に  
送ります

貴女に  
送ります

三六二五街三五〇

羅府商會聯合會

3500 LARIMER ST., DENVER, COLO.



賀

心

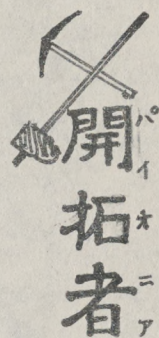
アオニ電氣用具  
クイ用モーター  
及び新アース

日本食料品一切  
何でも街用令に  
志します

通信販賣

三六二五  
商會

2639 LARIMER ST.,  
DENVER, COLO.



## 芳川積三

千九百拾五年頃と云へば、オレゴン、ワシントン両州到る處の製材所で邦人労働者が最も活躍した時代だ。ワシントン州の中央を貫くキヤスケード連峰の山麓にN・P線に沿つて、ブラツクダイアモンドと云ふ日産七八萬フイートを知り出す製材所があつた。ロギン・キヤンプと製材所の西方の邦人キヤンプは製材所の近くの一つ所にあつて、百人内外の邦人が製材所とロギン・キヤンプに半々に働いて居つた。其の頃一世は皆働き盛りであつた。割合に年若のW縣出身の高田が製材所の方、ロギン・キヤンプの方は同縣の土井が夫々邦人フォアマンをして居つた……

千九百十五年八月其の年は、華西州とも例年になく早續きで、然も毎年起る山火事が両州の森林地帯に猖獗を極め、只さへ蒸し暑い八月の炎天は毎日赤い煙が天を掩ひ、どんよりとして、人々の心を憂鬱にさせた。

或る日曜日の午後、邦人キヤンプの傍らにある直経七八呎もあり鬱蒼と四方に枝を擴げた楓の下で涼を取り乍ら雑談やら自慢談、はては口論に唇を尖らして居る者、碁將棋に熱中するもの、弄花に夢中になりて居る者、各自思ひ思ひの事をして骨休みをして居つた。其處へ下の方から白人としては少し小柄な何時もニコ／＼と笑を湛へてゐる製材所とロギン・キヤンプ西方の現場總支配人、ミスター・オーエンがやつて来た。彼は車座になつて花引に夢中になつてゐた一團の方へ行き、端の者に目配せしながら、ふいふで括られぶつが

つ愚痴つてゐる土井の背をポンと叩き、  
「ユー、ウイン。」

と聲をかけた。吃驚した土井は振り返  
つてオーエンを見て頭を抱へながら、

「ノーノー、バツド・ラツキー・エ  
ヴリータイム。」

と云つてクツ／＼と笑つた。役を食  
つたのか、途中で花札を投げ出して金  
を出す土井を見ながら、

「また買ったのか、土井。」

と大聲で、ハハ、と腹を抱へて笑つたが、  
「土井、明日愈々右谷のロギン・キ  
ヤンプを左谷へ移轉する事にしたから、  
御苦勞だが少し早い朝五時頃ボーイ  
を連れて新設ロギン・キヤンプへ行つ  
て仕度をして待つてゐてくれ。」  
と云つた。

「オーケー。」

「それから直ぐドンキーも機関車も  
全部そちらに廻すから、その積りでサ

イド・ツラツクの位置も定めて置いて  
呉れ、レールはあつたね。」

「オーケー、レールも充分あります。」

「ぢやあ頼んだぞ。」

と云つてから、傍のボーイ達に冗談  
を云ひ乍ら元来た道を戻つて行つた。

彼の後姿を微笑で見送りながらボー  
イ達はその噂をするのであつた。

「オーエン位日本人職員で日本人を  
使ふのに上手な白人は少ないなあ……  
此間、重役や株主三四人を連れて、俺  
等がレールロードを直して居るのを見  
に来たので、『邪魔になるから彼方へ行  
け。』と啖鳴つてやつたら道化た振り  
をして、苦笑しながらコソ／＼と行つ  
てしまつた。」

と、一人が述懐すると、

「全く日本人の機嫌を取りながら日  
本人を働かすのはうまいものだ。俺が  
家の修繕に板を少し呉れないかと云ふ

たら、遠慮する事はない。ヤードから入用の物は、ドシ／＼持つて行けと云った。あんなにされると勢一杯働かずには居られないわし。

「本當だ、此の會社が自分の物なら働人は全部日本人にすると云ったが、それが御世辞にしる悪い氣持はしないからなすし」

翌朝未明、救臺の杖木索引の大ドンキーが起伏重疊の山腹を濛々たる蒸氣を排出し、バリ／＼と草木を折り敷きながらマンモスの如くに、右溪谷から左溪谷へ移轉して来た。土井は多くのボーイ達を指揮しウ／＼上の方で工事をやつて居った。太陽がじり／＼灼くが如く照りつけ、腹は減つて来る。午前十一時頃ドンキーが不用意に落した火から發火したのか、右側の谷底から可なり大きな煙が上つて来た。一同あれつと思ふ間もなく強風に煽られて、火

は瞬く間に擴がつて行く。

「ソレ山火事だ！」

数ヶ月掛つて漸く出来上つた新ロギン・キャンプを火から救はおはならない。其處は補給品諸機械修繕所食料貯藏所のある所だ。かうした危急の場合、日本人の頭は機敏に働く。期せずして日本人達は新設キャンプに駆けつけ、協力一致して此の最重要所を火より救ふべく緩衝地帯を造るのであつた。近くの雜木を切り拂ふ者、土を掘り起す者、各自必死の努力を盡したが、猛火は怒濤の如く足下近くまで燃えて来た。濛々たる煙で目も口も開けられない。愚圖々々として居れば煙に巻かれて全員焼死せねばならない。土井は一同と共に急ぎ新事務所まで引上げた。見れば既にオーエンは技師長ネルソンと事務所のボーイの階段に立つて、茫然として燃え狂ふ猛火を見詰めて居った。出

井は急ぎ走せ寄つて彼の手をグツと握り悲壯な聲で、

「ミスター・オーエン、事茲に至つては最早手の施し様がありません。愚圖々々して居つては猛火に退路を断れて焼死しなければなりません。火の廻らない裡に早く麓に引上げ、さうして再攀を圖りませう。吾々日本人は日頃貴方から可愛がつて戴いた御恩報じに身を呈しても報ひます……サア一刻も早く。」

とせき立てた。オーエンは土井の手をかたく握り締め、

「土井有難う。よく日本人は最後迄最善を盡して呉れた。それに白人の傷人共は自分の荷物史背負つてドン／＼下りて行く。土井、俺も後から下りて行くから心配せずにお前達は氣を附けて先に行つて待つて居れ。」

大粒の涙が彼の双頬をぬらししてゐる。

「ちや、ミスター・オーエン、先に行つ

て居りますから早く下りて来て下さい。後髪を引かるゝ思ひで邦人一同は麓を指して避難した。其の時既に山火事を知つて製材所は運轉を中止して、日白住民全部は心配さうに一ヶ所に集まつて騒いで居つた。山から下りて来た邦人一同は晝飯もまだ食べて居ないからヘト／＼になつて居つた。一同はオーエンとホルソンの下りて来るのを只管待りて居たが四時となり五時となつてもその姿を見せず、一同の不安は益々募るばかり遂に六時となつた。火は終に金山を包んで仕舞つた。オーエンとホルソンの妻子は狂はんばかりに泣きながらあたりを彷徨ふのであつた。その哀れな姿を見て日本人の義侠心がグツと頭を持ち上げて来た。

どうしても二人を救ひ出さねばならぬ。

一同は決意した。土井は突然傍らの切株の上に立ち上り日白人の群衆に向つて

「皆さん、未だ下山して来ない、オ  
ーエン、ネルソン両氏を我々は萬難を  
排して救ひ出さねばありません。此の  
場合一刻も猶豫は出来ませんから、今  
此處で決死救出隊を編成しますから御  
賛成の方は前へ出て下さい。」

と叫んだ。其の時殆んど全日本人は  
前へ進み出た。

事は一刻を爭ふ時だ。土井は其の中  
から屈強の獨身者十二人を選び出し六  
人を以て一隊とし各自細引繩、手鉤、  
手斧、呼子笛、フラッシュライト等を身に  
附けロギン靴を穿き土井自ら一隊を率ひ  
て表山から、そしてキャンブ一頑丈な  
S縣出身の岩本が他の一隊を率ひて裏  
山から夫々出發した。残された日白人  
は皆悲壯な氣持で聲を發する者がない。  
夜の九時頃になつて、土井の一隊が  
戻つてきた。猛火に阻まれた彼等は遂  
に登山が出来なかつたのである。一縷

の望は裏山に向つた岩本組一隊に掛け  
られた。彼等は木の根や岩角に掴まり  
絶壁を攀ぢ登り漸くにして山腹に辿り  
着き溪流に沿つて猛火を避け、互に勵  
し合つて目指す附近と思はれる所まで  
来て見れば、キャンブの在つた邊は無  
惨にも一物をも餘さず焼き盡されまだ  
盛んに燃えてゐるのであつた。一同は  
聲を嗟らして、大聲で呼べど叫べど答  
へるものはブーツ／＼渦巻き猛る火の  
み。噫、オーエンとネルソンは遂に猛  
火のため永遠に歸らぬ……。遂に一  
同は絶望して引返さうとしたが、猛火  
は既に絶壁の方に移り退路は遮断され  
て歸る道はない。マゴ／＼して居れば  
全員焼死だ。唯一の退路は幾分火の薄  
い山水が滯下してゐる絶壁の外にはな  
い。互ひに勵し合ひながら一歩々々溪  
流に身を伏せる様にして進んで行つた。  
析柄ゴーツと襲ひ来る強風に煽られて

猛火は下紙に来る。一同それつと水の中へ這ひ蹲った。突如其の時先頭を乗つて居った岩本が、何んとも知れぬ異様な聲を上げて合圖の叫子をピリ／＼と吹いた。それつと一同駆け寄つて見れば今迄捜しあぐんだオーエンとホルソンが、疲勞困憊と煙のため溪流につんのめつて氣息奄々として半死の狀態に陥つてゐたのである。それを見た時の一同の喜び………。今迄の疲れは消えてゐる。勇氣百倍大兵の岩本、岡田が兩人を背に括りつけ後の四人が両方より之を助けつゝ、木の根や岩角を辿りつゝ衣服は破れ、血塗れとなつて漸く一同がタウンに着いた時、白人は思はず歡聲を上げ大地も震はんばかりだった。時は午前二時過ぎであつた。オーエンとホルソンは急遽タコマの病院に送られたが唯極度の疲勞と煙の爲め窒息状態であつたのを邦人の決死に依つて

救はれたのだから、さしたる事もなく一週間ばかりで退院して來た。爾來猶一層日本人驕兵となつたのは云ふ迄もない。日本人も亦オーエンを徳とし益々忠實に自分達の製銃所の様によく働いた。

十九百拾七年第一世界大戰に米國が参戰した年、オーエンの勧めに依つて土井は此の製銃所が切り出す總フイートを契約した。大戰の好景氣に乗つて、銃木の價も彌が上にも上つて、株主に十割の配當をした上彼の懷に轉がり込んだ現ナマが十二三萬弗あつた。此の事實を株主が知つて大いに驚き其の年一年で土井の契約は解かれたが、在米同胞の然も一介の邦人フォーアマンで一擧にして之れ丈の大金を儲けたのは空前絶後であらう。

吾人一世が白人社會から信用を得る迄には之に似通つた大小幾多の事實談があるのである。(完)

SHOP & SAVE at SEARS

IMMEDIATE SHIPMENT

謹賀新年

新年もあきらめず奮闘  
とリバイバル

ロスアンゼルス市

シヤスローバック商会

オリンピックとボイル街

シヤスで買へば

節約出来す

SEARS ROEBUCK & CO.  
LOS ANGELES, CAL.

## 編輯後記

○謹んで新年の御祝詞を申し上げます。  
往年の御援助を感謝し、併せて倍舊の御支援を御願ひ申し上げます。

○軍部の「加州閉出令」撤廢、W R A  
のセンター閉鎖聲明、QUO VADIS?

今こそ我等は大國民的襟度を堅持して、事態を正視し、根據なきデマを蹴散し、輕率妄動に陥る事なく、飽逆も利己的なる行動を避け、同胞互ひに勵まし扶け合つてゆかなければならない。  
○新年舞に相應しい表装と内容とを以て皆様に御見得する事ができたのを喜びたい。御多忙中に閑らず、本誌の質問に對し御回答下さつた諸氏に厚く御禮申し上げます。

○新年舞懸賞小説は應募作品十篇中より、久留島扶紗子、谷川江浦草両選者最選の結果以下の如く決定しました。

謹賀新年

平素も大変お世話  
を蒙り、誠にありがとうございます



アリゾナ州グレンデール市

昭和裕油醸造会社

SHOWA SHOYU BREWING CO.  
GLENDALE, ARIZ.

一等「一つの解決」

千世(本邦所載)

二等「志願兵」

里田一郎(次號掲載)

選外佳作「妻の心」

千代女

同「幼き人生」

田中等

○藤間勸須磨師匠、亞町無名氏、稲垣牧東氏より、夫々多額の御寄附を頂きました。

厚く御禮を申し上げます。

○本誌は個人或は特殊團體の單なる機關雜誌ではなく、戰時下同胞の精神修養と慰安の機關として、内容は出来得る丈多方面に亘り、一般同胞に愛讀され、精神修養に資する有益なる讀物により多く掲載したいと思つてゐますが、頁数が限定されてゐる爲、寄稿家並びに愛讀者に充分の御満足と與へ得ない事を甚だ遺憾と思つてゐます。

○先頃出所された前本誌編輯部員森西信子嬢から、お便りを頂きました。

「：逐々松原様方と離れくになつてゐました。……出發の時何だか感傷的

になつて、前途に限りない希望を抱き乍らも、やはり淋しい氣持でした。沙漠の假の住居とはいへ、二ヶ年有余の歳月を過して来たんだもの。春夏秋冬、四季を通じてのポストンの生活、コロラド河畔に、又山にと、友と樂しんだ日々も、今では懐しい淋しい思ひ出となつてゐました。……人間は誰でも過去の思ひ出に生きてゆくのでせうね。過ぎた日々のみが戀しいのは、私だけの感傷ではなく、誰も彼も同じ思ひを味はつてゐる事と思ひますわ……」

### ポストン文藝

第叁卷 第壹號  
一九四五、新年號

編輯人

柏原信雄  
有田百

印刷所

島原潮風  
ポストン印刷所  
ポストン文藝協會

(統政部内)

UNIT 1. CITY HALL POSTON, ARIZ.

Vol. 3, no. 1  
Jan. 1945

POSTON POETRY CLUB  
Unit 1 City Hall Poston Ariz.